Muv-Luv Alternative ―地獄に降り立つ狙撃手―

アーチャー【狼】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｕｖ－Ｌｕｖ　Ａｌｔｅｒｎａｔｉｖｅ　－地獄に降り立つ狙撃手－

【Ｎコード】
Ｎ８１２７Ｓ

【作者名】
アーチャー【狼】

【あらすじ】
国連軍との決戦。
その戦いで、全ての過去に決着をつけた狙撃手は、仲間に思いを託して散った。
彼の名は、ニール・ディランディ。

又の名を、「成層圏の向こう側まで狙い撃つ男」ーーーロックオン・ストラトス。

彼が再び目を覚ましたのは、異世界。

そこは、あいとゆうきのおとぎばなしの世界。

絶望の地平に朽ち逝く魂の残照。

滅びゆく世界に燃え上がる生命の炎。

そして紡がれるもう一つ未来。

物語、ありえない筈の道を歩む。

それは、語られる事のないもう一つの「あいとゆうきのおとぎ話」

……

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「終わりなき詩」（前書き）

これを読んでみようと思ってくれた皆様どうもありがとうございます。

作者のデュナメスです。

それでは、駄文ですがどうぞ！

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「終わりなき詩」

これは、ある一つの物語の終焉ーーーーー

Ｓｉｄｅスメラギ

「これで……国連軍の第一派は退けられたか……」

ブリッジに、メンバーの一人ーーー砲撃手、ラッセ・アイオンの声が響いた。

私設武装組織「ソレスタルビーイング」の母艦「プトレマイオス」。暗礁宙域に浮かぶそれは、四機のガンダムと共に暗闇に包まれた海を進んでいた。

「そうね……」

プトレマイオスの艦長席に座る、ソレスタルビーイングの戦術予報士スメラギ・李・ノリエガは一時の安堵の溜息をつく。

「国連軍に譲渡されたのは、３０基の擬似ＧＮドライブ……そのうち、今の戦いで１１基を破壊した……」

「これで、敵の気勢が削げれはいいがな……」

ラッセが苦々しい表情で言う。

そうだ。

未だに自分たちは、戦いの渦中にあるのだ。

「機体の修理と整備を急いで！」

スメラギは、全員へまだ戦いが終わっていない事をもう一度告げた。

「デュナメス、ヴァーチェの状態は？」

オペレーターのフェルト・グレイスの座るモニターから、ハンガーにいる整備士のイアン・ヴァスティへと通信を繋げる。

『両方とも何とかいける。ただ、ヴァーチェのほうは、これ以上の損傷は無理があるぞ。最悪、ナドレでの出撃も考えないとならん。』

数秒して、イアンの苦々しい返答が返された。

スメラギは、その言葉を聞いて自身もまた苦々しい表情を浮かべる。

前々回の戦いで、ヴェーダのバックアップを失い、年長のガンダムマイスターは右目を失い、先程また、国連軍の追撃を受け、自分たちはジリ貧状態にあった。

戦闘が終了し、ラグランジュ３のＣＢの秘密基地に逃れてから既に３時間。

スメラギの予想では、あと４時間後には敵と再びエンカウントする。

「そこまで、何とか機体の整備が終われば……」

本来は非武装艦であるプトレマイオスに、今回は強襲用コンテナを設置し急場凌ぎの戦闘艦とした。

秘密基地に残っていた、キュリオスの追加装備であるテールブース

ターのキュリオスへの取り付け作業も急ピッチで行っている。
前回の戦いで、本来なら抜けていたはずのロックオン・ストラトスの奮戦と、少ないながらの粒子残量で決死の救援に駆けつけたラッセ・アイオンのＧＮアームズの参戦は大きかった。

「まだ、手はある……！」

スメラギは、覚悟にも似た小さな呟きを発した。

四時間後ーーーーー

暗礁宙域に浮かぶプトレマイオスは補足され、国連軍の宇宙輸送艦からＭＳ部隊が出撃した。

Ｓｉｄｅロックオン
「来やがったか……！」

デュナメスのコクピットに座りながら、ロックオンは言う。
１９機の擬似ＧＮドライブ搭載型、そしてーーーー

『敵機の中に、スローネがいます！』

「いやがった……！」

かつて、ＫＰＳＡというテロ組織の頂点に君臨し、神を騙り、争いを引き起こした男。
自分の家族を殺した男。
各地を転々とし、戦いを求め、殺し合い、人を殺し、それでも飽き足らず傭兵となり、今また自分たちの前に「ガンダム」に乗って立ちはだかっている。

『カタパルトへデュナメスを接続。リンケージを確認。コントロールを、ロックオン・ストラトスへ譲渡します。』

「オーライ。アイハブコントロールだ。」

カタパルトが開かれ、その先に宇宙空間が広がる。

『進路クリア、デュナメス発進どうぞ！』

「ガンダムデュナメス、出る！」

デュナメスが、再び虚空へと飛翔した。

Ｓｉｄｅスメラギ

「これで、切れるカードはすべて切った……」

最悪の状況の中で、最も最良の戦術プランを立て、最善の布陣を立てた。

「これって……！」

ブリッジのオペレーターの一人、クリスティナ・シエラが驚愕の声を上げる。

「スメラギさん！」

「どうしたの！？」

「敵部隊の後ろから、急速接近中の反応があります！これはーーーMAクラス！？」

「まだ切り札を隠してやがったのか……！」

砲撃手のラッセが呻く。

モニターに、赤いGN粒子を放出するMS部隊が映り、さらにその後ろに金色廼巨大な物体が控えているのが見えた。

「これは・・・・・・宇宙艦！？」

「違うわ・・・・・・擬似太陽炉搭載型のMA・・・・・・！」

この状況での敵新型MAの投入・・・・・！

考えうるーーー否、想定外の出来事の中で最悪の展開だ。

まさかーーーあれが離反者の乗る……！

「敵MAから、巨大なエネルギー反応あり！推測で、7基のGNドライブを搭載している模様！」

「擬似GNドライブを七基も搭載してるだと！？」

「ということは……それ相応の武装を装備しているということね……！」

「敵機より、高エネルギー反応あり！まさかこれはーーー！」

次の瞬間、金色の閃光がプトレマイオスへ襲いかかった。

「リヒティ！緊急回避！」

「言われなくとも……！」

スメラギが緊急回避を命じ、操舵手のリヒテンダール・ツェーリが、必死に操縦桿を左へと傾ける。

だがしかしーーー現実はあまりにも非情だった。

衝撃が、艦全体を震わす。

「後部メインスラスター損傷！ＧＮ粒子の供給断絶！航行不能です！」

フェルトが悲鳴にも似た声を上げた。

この状況での航行不能・・・・・・！

それは、ほとんどが「ゲームオーバー」を意味していた。

こんな状態、格好の的になるだけだ。

スメラギは、四人のガンダムマイスターが奮闘してくれる事と、生き残ってくれることを、祈るしかできなかった。

Ｓｉｄｅティエリア

「プトレマイオスが……！」

『チッ……！厄介なのを出して来やがった……！』

デュナメスに乗る隻眼の狙撃手の、怒りを押し殺した声が聞こえる。

ヴァーチェに乗る若きガンダムマイスター、ティエリア・アーデは、モニターに映し出された紫煙を撒き散らす母艦を見ながら歯噛みした。

元来、プトレマイオスは非武装艦だ。

ーーーやはり、無理があった……！

「だが、ここで引くわけにはいかん！」

ーーー粒子は充填済みだ。気休め程度にしかならん。だが……！

「攻撃をかける！アレルヤ！」

『わかっている！』

「『いっけえええええ！！』」

ヴァーチェのＧＮバズーカ二門。
キュリオスのテールブースターに装備された二門のＧＮキャノン。
二体のＭＳから、巨大な桃色の閃光が放たれた。

Ｓｉｄｅロックオン

「いくぞ刹那！」

『了解した！』

「ハロ、バックアップを頼む！」

『了解！了解！』

「効き目がハンデだが、やってやるさ！」

ロックオンはそう意気込むと、ライフル型コントローラーを下ろし

構えた。
それに合わせてデュナメスが、ＧＮスナイパーライフルを構える。
「まずは撹乱射撃で！」
そして、放たれる桃色の矢。
撹乱を目的に放たれた弾丸は、命中することはないが、敵の連携に綻びを生じさせる。
「行け、刹那！切り裂け！」
『了解。ガンダムエクシア、目標を駆逐する！』
そこへ、ＧＮソードを展開したエクシアが加速して突撃する。
「甘いんだよ。いくら同じ能力（スペック）だからって、質ではこっちが上だ！」
敵を一機、二機と撃破するエクシア。
そこへ、エクシアの背後から攻撃を試みるジンクスの動きをＧＮスナイパーライフルで牽制して攻撃の邪魔をする。
「やらせねえよ。」
そして、レティクルに敵機を捉える。
ロックオンは、再び引き金を引いたーーー
Ｓｉｄｅティエリア
「ちぃ……！」

ヴァーチェめがけて、集中砲火を放つジンクスの部隊。
猛烈な射撃に、怯む。
流石のヴァーチェといえども、この攻撃はキツイものがあった。
不意に、アラートが鳴る。

「あれは……！」

宇宙空間に浮かぶ資源衛星。
その裏から現れた、瞳に映り込む緋色の機体。

「やはりスローネか！」

『ハッハァーー！』

ガンダム・スローネツヴァイが、ＧＮハンドガンを乱射しながら突進してきた。
それに対して、ティエリアはトリガーを引き、極太のビームをスローネめがけて放つ。
しかし、それは当然の如く回避された。
スローネから、二つの小さな反応が放たれる。
ＧＮファング。

「このおおお！」

二門のＧＮバズーカを下げ、上方から迫るＧＮファングへ計四門のＧＮキャノンを向ける。
再び引かれるトリガー。
同時に放たれた閃光が、二つのファングを包み込み消滅させた。

『まだあるんだよ！ノロマがぁ！』

爆発を起こしたＧＮファングの紫煙を突き破り、新たなＧＮファング２基がヴァーチェへと襲いかかる。
鋼鉄の牙が左手のＧＮバズーカと、右背部のＧＮキャノンに喰らいつき破壊する。

「うわあああああ！！」

衝撃で、ヴァーチェの巨体が揺れた。
緋色の機体が、身を翻して去っていく。

ーーー逃した……！

ＧＮキャノンの片方が破壊され、ＧＮ粒子の放出量が減少し、ＧＮフィールドが半減する。
そこへ、ジンクスの猛攻が襲いかかった。

Ｓｉｄｅアレルヤ

「ティエリア！」

猛攻撃にさらされるティエリアのヴァーチェ。
しかし、アレルヤに仲間の心配をするほど余裕はなかった。
彼もまた、何機ものジンクスに囲まれていたのだ。
その内の一機は、自身と同じ超兵。

「く……！」

『被験体Ｅ－５７！』

衛星の裏から、ジンクスが現れる。

「ぐあああ！」

それが放った攻撃によって、背部に装備されたテールブースターが火に包まれた。

それを瞬時に廃棄し、変形すると同時に左手でサーベルを抜く。

「ソーマ・ピーリスか……！」

『貴様を倒す！』

「くぅ・・・・・・・！」

ーーー変われよ相棒！

「（ハレルヤ・・・・！？」

サーベルが拮抗しプラズマが迸る。

「ははははは！！やらせるかよぉ！！」

ソーマの「倒す」という言葉に答えたのは、もう一つの人格ーーーハレルヤだった。

「甘ちゃんには任せてらんねぇな！ここは、全力で殺しにいってやるよおおおおお！！」

凶悪な笑みと、歓喜に満ちた声をあげて、殺人鬼は同類への反撃を開始した。

Ｓｉｄｅ刹那

『一気に本丸を狙い撃つ！行くぞ刹那！』

「ああ！」

眼前に迫る、金色のＭＡ。
それへ向けて、デュナメスと強襲用コンテナから何十発ものＧＮミサイルが放たれた。
それらは真っしぐらにＭＡへと向かいーーー全弾が命中する。

『これで少しは……』

「まだだ．．．！」

だがそれは、効いていなかった。
否ーーー防がれたのだ。
金色のＭＡが瞬時に張った高出力のＧＮフィールドによって。
返す刀で放たれるオレンジ色の矢が、二機を襲う。

『こいつ……！』

「く……！」

攻撃を避けながら、それでも距離が詰められない。

『なら、俺に任せろ！』

前面にＧＮフィールドを集中展開した強襲用コンテナが後方から金色のＭＡへ向かう。

『遠くからの攻撃が効かないなら、直接攻撃だ！』

加速した強襲用コンテナが、金色のＭＡへ体当たりをかけた。
その体当たりを、金色のＭＡは強力なＧＮフィールドで阻む。

『だがな、懐に潜り込めばこっちのもんだぜ！』

拮抗する二つのＧＮフィールド。
相殺し合う光の壁に、綻びが生じていた。
徐々に、壁の内側へと食い込んでいく強襲用コンテナ。

『これだけの近さだ！受けて無事で済むわけがーーー』

ラッセが、トドメの一撃とばかりにゼロ距離によるＧＮキャノンの砲撃を行おうとした瞬間、金色のＭＡの両側の装甲部分が展開され、甲殻類ーーー例えるならカニーーーのような手が現れ、強襲用のＧＮキャノンの砲門を鷲掴みにした。

『ふはははははははは！！』

回線から、歓喜に満ちた男の笑い声が聞こえる。

『忌々しいイオリア・シュヘンベルグの亡霊共が・・・！この私、アレハンドロ・コーナーが・・・・・・このアルヴァトーレで新世界への手向けにしてやろう！！』

アルヴァトーレの両腕が、鷲掴みにした強襲用コンテナを強引に左右へ引っ張る。

『冗談！！』

爆発する直前、強襲用コンテナからＧＮアームズが分離された。

『くそったれ！だけどな、こっちは三対一だぜ！』

『俺も忘れなさんな！』

反撃に転じようとした三機とアルヴァトーレの間に、緋色の機体が割り込む。

「アリー・アル・サーシェス……！」

『よぉ、クルジスの餓鬼。元気にしてたか？』

『てめえ……！』

『そろそろ俺もてめえらの顔は見飽きてたところだ……ここで、手始めにクルジスの餓鬼、お前を血祭りにあげてやるよおおお！！』

ＧＮバスターソードを抜いたスローネが、刹那のエクシアへと襲いかかった。

『てめえの相手は、この俺だ！！』

Ｓｉｄｅロックオン

「てめえの相手は、この俺だ！！」

ＧＮビームサーベル抜いたデュナメスが、スローネの斬撃を止めた。

『チッ……あの時のやつかぁ！？』

「お前に刹那はやらせねえよ！」

刃と刃が拮抗し、プラズマの奔流が巻き起こる。

『ロックオン！』

「刹那、お前はラッセとあのアルヴァトーレとかいうやつを叩け！
俺はこいつをやる！」

『大丈夫なのかロックオン？』

ラッセの心配したような声が耳に響く。

「心配すんなよ。俺はまだ死ぬ訳にはいかねえよ。」

『殺りあってる最中にお喋りかい！』

「黙ってろ戦争中毒が！」

斬撃を振り払い、距離を取る。

「刹那、エクシアになぜ実体剣が装備されているかわかるか？」

『……』

「ＧＮフィールドに対抗するためだ。」

『……』

「お前は、俺たちの切り札なんだ。それを忘れるな。さぁ行け！」

刹那は、無言でエクシアとともにアルヴァトーレへ向かった。

『死ぬなよ、ロックオン。』

ラッセはそれを言い残して刹那に続く。

「さて……」

『いいねぇ……』

「追わなくていいのかい？」

『はは……仲間への別れは済んだってか？今から殺しあう相手だ。それに……』

「それに？」

『お前と殺しあった方が殺しがいがありそうだぜ！！』

「そうかい！！」

Ｓｉｄｅ刹那

『刹那、ドッキングだ！』

「わかった！」

エクシアがＧＮアームズにドッキングする。

『邪魔をするか亡霊！』

「誰が！」

猛撃を放ってくるアルヴァトーレの攻撃をＧＮフィールドで受け流しながら、距離を詰めていく。

「うおおおお！」

『もう一度、直接攻撃だ！』

大型ＧＮソードを斬撃態勢に移行し、一気に距離を詰める。

「切り裂く！」

『やってみろ！』

「うおおおお！」

刹那の咆哮とともに、ＧＮアームズとエクシアは突撃した。

Ｓｉｄｅティエリア

「くうぅ……！」

衝撃が、身体を襲う。

ティエリアの乗るヴァーチェ。

それはすでに、満身創痍の状態にあった。
四方八方からヴァーチェの装甲へ叩きつけられる赤い光弾。
装甲はとうに限界を超えていた。

ーーーもう長くは待たない。

「ならば……せめてこの一撃をぉ！！」

猛攻撃に晒されながら、ヴァーチェは残る一門のＧＮバズーカを中央に構えた。
そして、切り札を発動させる。

ー【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】ー

「いけえええええ！」

ティエリアが吠える。
それと同時に、極太のビームジンクスの部隊へ向けて放たれた。
ビームは、五機のジンクスを巻き込み消滅させる。

「まだだ……！」

ーーートランザムはまだ行ける・・・！

光芒が消えると同時に、ティエリアはヴァーチェの装甲を全てパージする。

「うおおおおお！」

外装をパージし、赤色灯に発光した機体ーーーガンダムナドレが姿

を現した。
赤色に発光したナドレが、装甲の裏に隠されていたＧＮライフルを抜き、さらなる反撃に転じる。
鬼神の如く駆け抜けるナドレ。

「ナドレ、目標をーーーーー！」

しかし、その叫びは最後まで続かなかった。
最後の二機に攻撃を放とうとした瞬間、無情にもトランザムは終了する。

「な……！？」

『セミヌード如きが、俺に楯突いてんじゃねえよぉ！！』

ナドレに、赤色の矢が襲いかかり、左腕と両足を砕く。
装甲にヒビが入り、コクピット内にプラズマが走る。

「まだだ……！まだ死ぬ訳にはいかない……！」

ナドレの装甲は破壊され、コクピットに警告音が響き渡る。

「死ぬ訳にはいかないんだ．．．．！こんな僕に生きる道を示してくれた．．．．．．．．．．」

残る最後の力を振り絞り、ティエリアは引き金を引いた。

「ロックオンのためにも！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

一人、また一人と散っていく仲間たち。
今またここで、二つの命が終わりを迎えようとしていた。
残った最後のジンクスが、損傷したプトレマイオスに迫る。

『やらせないわ！ＧＮミサイル！』

強襲用コンテナに移乗していたスメラギが、操縦席のトリガーを引く。
プトレマイオスに残された最後の強襲用コンテナから、二発のＧＮミサイルが放たれジンクスに命中した。
だが、ジンクスは止まることなくプトレマイオスの眼前に迫る。

『死角に回り込むつもりね・・・・・！』

『トレミーからコンテナを切り離す！』

強襲用コンテナに乗るスメラギとイアン、そしてフェルト。
プトレマイオスからコンテナを切り離し、迫るジンクスの迎撃を試みる。

だが、間に合う筈がない。

未だプトレマイオスのブリッジに残るリヒティとクリス。
プトレマイオスのブリッジに、ジンクスが到達した。

銃口が、ブリッジに向けられる。

「……！」

クリスが、表情を恐怖に染め、声にならない悲鳴をあげた。

「クリス！」

操縦席から身を乗り出し、クリスティナを庇う形で覆い被さるリヒティ。

直後、赤い閃光がブリッジを貫きーーー破壊した。

Ｓｉｄｅクリス

「……え……？」

クリスは、自分を覆う何かの重みによって目を覚ました。

「リヒティ…」

それは、自分を庇う様にして覆いかぶさるーーー変わり果てたリヒティだった。

「大丈夫…っスよォ…」

苦しげにリヒティは言う。

「親と一緒に……巻き込まれて……体の半分が……こんな、感じ……生きているのか……死んでいるのか……」

「リヒティ……」

そんな状態で今まで生きてきて、そんな風に思っていても、自分を助けようとしてくれた。

「馬鹿ねェ、あたし……すぐ近くにこんないい男、いるじゃない…！」

ーーー目の前にいたじゃないか？

「…ホントっスよ……」

いつものように、からかうようにリヒティは答える。

「見る目ないね、あたし…」

そう、クリスが言った瞬間……

「ホン…ト…」

リヒテンダール・ツェーリは、あの世へ旅立った。

「リヒティ…！」

力を失い、目を閉じるリヒティ。

不意に、通信機からスメラギの声が聞こえてきた。

「スメラギ・・・・・さん・・・・・・？」

『無事だったのね！？リヒティは！？』

スメラギの安堵した声が聞こえる。

でも、リヒティは死んでしまった。

スメラギの問いに答える事はできない・・・・・・・
それに、自分もそう長くない。
彼女の背中にはーーーー深々と金属の破片が突き刺さっていた。

「フェルト……いる……？」

『います！』

直ぐに、返事が返ってくる。
せめて、妹分に言っておかなくちゃ……

「もうちょっと…オシャレに…気をつかってね……？」

ーーーいつも、あんまり女の子みたいにおめかししなかったフェルト。

ーーーどこか放っておけないフェルト。

ーーー自分が言わなきゃ、オシャレなんてしないよ。

ーーーあはは・・・・・・・もう、こんな事なのに。
もう、話せないからかな？口から出るのは、他愛もないことなんだね……

「私たちの……分まで……生きて……ね・・・・・・？・・・・・・・ね？」

『クリス！』

「お願い……世界を……変えて……お願い……」

次の瞬間、プトレマイオスのブリッジだった場所が閃光に包まれる。
その一言を残し、クリスティナ・シエラもまた思い人とともにーーーーー黄泉の国へと旅立った。

「リヒティ！」

イアンが叫ぶ。

「クリス！」

スメラギが叫ぶ。
目の前で散った、二人。
思いを託して散った、二人。
フェルトにとって、それは「家族」同然の存在だった。
例え血がつながっていなくとも、プトレマイオスで一緒に戦った唯一の「家族」だったのだ。
だからこそ、彼女は叫んだ。
自身の姉になってくれた少女に名を。

「ふ…くぅ……ぅぅ……！クリスティナ・シエラあああああ！！」

そして、プトレマイオスと呼ばれた船はその短い生涯に終止符を打った。

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「終わりなき詩」（後書き）

ふぅ……これであと二つを投稿すればいける……！

これからもこれ読んでくれる人たちは、よろしくお願いします。

続くかな……

感想、意見などお待ちしております！

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「世界を止めて」

ーーーーそれは、一人の男の最期の戦い……

Ｓｉｄｅロックオン

”ザアン！ザン！”

ＧＮビームサーベルとＧＮバスターソードの刃が交わり、衝突音が響き渡る。

宇宙空間を、二機の人型機動兵器（モビルスーツ）が駆け抜けた。

そして、刃が再び拮抗する。

濃緑の機体ーーーガンダムデュナメスに乗るガンダムマイスター、ロックオン・ストラトスは、眼前に迫った緋色の機体に乗る傭兵へ問うた。

「ＫＰＳＡのサーシェスだな！？」

オープン回線で叫ぶ。

直後、獰猛な雰囲気を漂わせる口調で、相手は答えてきた。

『はん！クルジスの餓鬼に聞いたかぁ！？』

ーーー認めやがった……！

今この瞬間、俺は家族の仇を初めて目にした。

だったら・・・・！

「１０年前のアイルランドでの自爆テロを指示したのはお前か！？」
自分の人生を捻じ曲げたあの忌まわしい事件が誰の手によって行われたかを問う。
『だったらどうしたよぉ！？』
「何故あんな事を！」
緋色の機体ーーースローネツヴァイに乗る男は、さも当然の様な口調で答えてくる。
『俺は傭兵だぜ？それになぁ！』
刃が弾かれ、再び交錯する。
『ＡＥＵの軌道エレベーター建設に、中東が反発すんのは当たり前じゃねぇか！！』
ーーーふざけるな！そのせいで、俺は家族を失ったんだ．．．．！
「関係ない人間まで巻き込んで……！」
怒りに任せて放った言葉に、サーシェスは嘲笑うかのように言葉を返す。
『てめえだって同類じゃねえか……紛争根絶を掲げるテロリストさんよぉ！？』
「咎は受けるさ……」
そうさ。俺は世界に喧嘩を売った稀代のテロリストだよ。

勿論、全てが終わったあとで罰は受けるさ。

「だがな・・・・・・・・それは、お前を倒した後でなぁ！！」

『やってみやがれ！！』

「お前は戦いを生み出す権化だ……それを、ここで今、断ち切ってやる！！トランザム！！」

ー【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】ー

『な……！』

驚愕に満ちた野郎の声が聞こえた。

だが、そんなことは関係ない。

ーーー俺は、今日ここで討つんだ。

ーーー仇を。

ーーー家族の仇を……！

『またこいつかよぉ！？』

最初の一撃。

それは回避される。

だがそれは同時に、スローネの動きを鈍らせた。

返す刀で、態勢を崩した状態からスローネは左右に装備されたスカート部からＧＮファングを放つ。

二撃目と三撃目。

GNファングの二つが、放たれたビームに呑まれて破壊される。
残ったGNファングが赤色の攻撃をデュナメスへ向けて放った。
トランザムによって三倍化したスペック。
赤色に輝くデュナメスは攻撃を全て回避し、GNスナイパーライフルから放たれた四つの閃光が残るファングを消滅させる。

『くそったれええ！！』
「うおおおおお！！」

GNハンドガンを乱射しながらの突進。
そして、GNバスターソードを振り上げて逆襲に転じてきたスローネ。
しかし、斬撃は当たる事はなかった。

『な……！』

GNバスターソードが振り下ろされるが、そこに八つ裂きにしたかった相手はいない。
サーシェスは驚愕の声をあげる。

直後、スローネは四方向からの衝撃に襲われた。

『なあああ！？』

デュナメスがスローネへ突撃をかけて蹴り飛ばす。

「俺は、この世界を変える……だがそこに、てめえの居場所はねえ！これがなあ！」
『ぐるあああ！』

ーーーここで全てのけじめをつけてやる。

ーーーここで、全ての過去に決着をつけてやる。

ーーーここで……全てを終わらせる。だからさぁ……

『てえめえええええええええええええ！！』

「狙い撃つぜえええええええええええええええ！！」

”ザァン！！”

二機がもつ刃が交わり、離れる。

『が・・・・・あぁ・・・・・・・・・！この・・・・・・・死に・・・・ぞこない・・・・・が・・・・・・・・！！』

「失せやがれ、下衆が・・・・・・！」

デュナメスの後ろに、光が生じた。

そしてーーーーー今ここに、一人の狙撃手の決着がつけられた。

Ｓｉｄｅハレルヤ&アレルヤ

「ははははは！おらぁ！」

ＧＮビームサーベル。

それにより繰り出される斬撃は、確かにソーマ・ピーリスを追い詰めつつあった。

『く……！被験体Ｅ－５７ぁ……！』
「どうした同類！」
斬撃によって、ジンクスを吹っ飛ばす。
だが、ハレルヤはここで気づくべきだった。
後方から迫る、ジンクスの存在に。
警報の音に、ハレルヤはもう一つの存在が自分へ迫っている事を認識した。
『そこにいたかガンダム！！ハワードの仇ぃ！』
「邪魔すんじゃねえよ、雑魚がぁ！」
突進してくるジンクスへ向けて、ＧＮサブマシンガンを連射する。
それは確かに、ジンクスに命中した。
しかし、トドメにはいたらない。
爆発がおこり、大破するジンクス。
しかし、ジンクスはその状態で尚キュリオスへの突撃をやめなかった。
『俺はユニオンのぉぉ……フラッグファイターだあぁぁぁ！！』
雄叫びをあげたジンクスのパイロットは、あろう事か自分へ特攻をかけてきた。
何ものの邪魔もなければ、その特攻は無意味なものと化していただろう。
そう。何ものも邪魔しなければ。
「当たるか……」

ハレルヤが操縦桿を引き、特攻を回避しようとした瞬間。
別方向からの射撃が、反応を遅らせた。
ソーマによるジンクスの撹乱射撃。

「な……！ぐあああああ！」

それによって、特攻は成功し、紫煙とプラズマを纏ったジンクスが、
キュリオスの右腕を奪い去っていく。
さらに襲いかかる射撃。
それにより、右脚が奪われた。

「くそったれ……！こんなところで死ねるかよ！」

攻撃をよけながら、ハレルヤは吐き捨てる。

「俺は生きる！他人の生き血を啜ってでもなぁ！」

『僕も生きる！』

ハレルヤの脳裏に、甘ちゃん（アレルヤ）の声が響いた。

「お前はすっこんでろ！肝心な時に何もできねぇ臆病もんに用はねぇ！」

『僕はまだ、世界の答えを聞いていない。だからそれまでは……死ねない！』

「……」

ハレルヤは内心驚いていた。

ーーー甘ちゃんが、ここまで言うようになるとはね。

「はは……だったらよぉ。見せつけてやろうぜ？」

『ああ。僕たちの本当の力を。』

「本物の……超兵ってやつを！」

ヘルメットを脱ぎ捨てて、髪をたくし上げてオールバックにする。

『覚悟しろ！お前は、ここで私が倒す！』

「当たるかよぉ！！」

損傷したキュリオスに止めを刺すべく、ソーマの乗るジンクスが切りかかってきた。

その斬撃を、身を捻らせて回避するキュリオス。

『落ちろ”羽付き”！』

その直後に、キュリオスへ向けてセルゲイの乗るジンクスから赤い閃光が放たれた。

「直撃コース・・・・・」

「避けてみせるよ！！」

『なに！？』

死角から放たれた筈の射撃。

それを、ハレルヤとアレルヤが身体を動かし、キュリオスを巧みに

操縦して回避する。

「軸線を合わせて！」

「おうさ！」

「同時攻撃を！」

そのままの勢いで加速し、セルゲイの乗るジンクスめがけて左脚による強烈な蹴りを叩き込んだ。

「さっきのようにはいかねえ！！」

「そうだろうハレルヤ！！」

『死に損ないが・・・・・・・・貴様は私が全力を持って倒す！！』

「やってみやがれ！！」

ソーマの乗るジンクスが、ビームサーベルを抜いて肉薄してくる。

そして振り下ろされたビームサーベルによる斬撃はーーーしかし赤く輝き出したキュリオスによって回避された。

「トランザム……これで、終わらせる！」

『くぅ……！？』

返す刀で、ジンクスの右腕を切り落とす。

『何故だ！？私は完璧な超兵の筈だ！』

「分かってねェなァ、女ァ……」

バランスを崩しながらも反撃に転じてくるソーマ。

ビームサーベルによる反撃をハレルヤもまたビームサーベルで受け止めた。

叫ぶソーマに、ハレルヤは言う。

「オメェは完璧な超兵なんかじゃねえ！脳量子波で得た超反射能力…・・・・だがテメエはその速度域に思考が追いついてねんだよ！動物みたいに本能で動いているだけだ！」

『そんなことォ！』

左手で腰部にマウントされたビームライフルを抜き、ジンクスが至近距離で銃撃する。

しかし、その攻撃はいとも簡単に回避されてしまった。

「…だから動きも読まれる」

嘲笑うかのように、ハレルヤは吐き捨てる。

「反射と思考の融合、それこそが超兵のあるべき姿だ！」

身を翻し一回転したキュリオスは、ジンクスの背中へ蹴りを叩きこんだ。

「さよならだ！女ァ！」

止めの一撃を、ジンクスへと叩き込もうとしたその時。

もう一機のジンクスが、二機の間に割り込んできた。

「邪魔を……！」

攻撃が阻まれたことに、苛立ちの声をあげるハレルヤ。

そしてそれはーー敵に最大の好機を与えてしまった。

動きが止まったキュリオス。
そこへ叩き込まれる赤色の閃光。
ハレルヤとアレルヤ。
二人の視界が、血色に染め上げられた。

Ｓｉｄｅ刹那

戦いは、終盤へと突入していた。

『刹那……！俺たちの……存在を……！』
「ラッセ！」

分離したＧＮアームズが、最後の一撃を放つとともに爆発する。

「ラッセェ！！」

煙に包まれるアルヴァトーレ。

「これで……終わったのか……」
『やってくれたよ……未熟なパイロットでここまで私を追い詰めるとは！』

その中から、アルヴァトーレと同じ色のＭＳが現れた。

「貴様か……世界の歪みはあああああ！！」
『ははははははは！貴様程度の腕で、このアレハンドロ・コーナーを倒せると思えるか！？』
「エクシア……目標を駆逐する！」

エクシアが、金色の機体ーーーアルヴァロンへ突進する。

『無駄だ無駄だ無駄だあああああ！！』

ビームは全て弾き返され、斬撃は全て阻まれる。

それらは、全てが金色の機体を覆う金色の薄く堅牢な壁によるものだった。

ＧＮフィールド。

「く……！」

『ふはははははははははは！お前は今ここで、朽ち果てるのだ！』

拮抗しあう刃が、アルヴァロンによって弾き返された。

『私色に染め上げ、私が導きを行う世界に、君たちの居場所はない！！ここで、塵芥と成り果てろ！エクシアあああああ！！』

背部のウィングが前面に展開され、ライフルがエクシアへ向けられる。

そしてーーー巨大なビームがエクシアへと放たれた。

Ｓｉｄｅアレハンドロ

ビームが、消える。

これで、私の計画は最終段階を終えた。

あとは、残る俗物どもを消しされば……

ーーーだから、甘いんだよ。

「な……！？」

悪寒が背中を襲う。
その時、別方向から桃色の閃光が向かってきた。

「あれは……！？」

赤い光。
それは、イオリア・シュヘンベルグから託された最後の希望。

「まだ生きていたというのか！？」

再び向かってきたのは、赤色に光り輝く青と白の機体ーーーガンダムエクシアだった。

Ｓｉｄｅ刹那

「見つけたぞ、世界の歪みを。それは、貴様がその元凶だ！」
『最盛期は既に始まっている！まだ破壊を続けると言うのか！！』
「無論だ！！」

アルヴァロンが放つ攻撃を回避しながら、エクシアは急速に距離を詰めていく。

「俺は、戦う事しかできない存在……なら、俺はその力で未来を切り開く！」
『ぬうううう！』

「紛争根絶。それを理想に掲げるソレスタルビーイング！」
ついに目前へと迫り、アルヴァロンへ刃を突きつける。
それは、ＧＮフィールドによって阻まれるーーー筈だった。
『ＧＮフィールドが！？』
「俺とガンダムが、それを成す！」
オレンジ色の輝きが消える。
右肩へと、ＧＮブレイドの刃が深々と食い込んだ。
腰部のビームサーベルを抜き、紫色の球体の両側へ突き刺す。
そして、さらにもう二本のＧＮダガーを両肩に突き立てる。
「そうだ、俺がーーー」
最後に、展開されたＧＮソードの刃がーーーアルヴァロンを切り裂いた。
「俺たちが、ガンダムだ！！」
Ｓｉｄｅアレハンドロ
「ぐ……」
激痛が、身体全体を襲う。
目の前は灰色の煙に包まれ、モニターのところどころにはヒビが入っていた。
「認めん……ぞ……！ここで……コーナー家２００年の悲願が……朽ち果てるなど……！」

まだ動く左腕を、エクシアへと伸ばした。
「お前も……道連れだ！！」
最後の力を振り絞り、アルヴァロンはエクシアへとくみつこうとした。
だがーーーその伸ばした金色の腕は、桃色の閃光が貫かれた。
「な……！」
視界から、青と白の機体が離れていく。
「朽ち果てるのは……私……だと……！」
『アレハンドロ・コーナー』
不意に、耳にあの青年の声が聞こえた。
自分が、「天使だ」と言った青年だ。
モニターに、その青年の顔が映り込む。
リボンズ・アルマーク。
『貴方はいい道化でしたよ。』
リボンズの口が、静かに笑みを形作った。
それは、言わば天使のような微笑み。
「なん……だと……？」
『すでに貴方の思い描いていた計画は、僕の計画になっていたのさ。

『
青年の口から語られる現実。
結局、アレハンドロ・コーナーは利用されただけなのだ。
この、天使のような青年によって。
全てのイノベイドの頂点に立つ、このリボンズ・アルマークによって。

『さようなら、アレハンドロ・コーナー。』
「リボンズうううううう！！」

怨嗟の念を込めて、アレハンドロはその名を叫んだ。

次の瞬間、アルヴァロンは閃光に包まれた。

Ｓｉｄｅ刹那

「はぁ……はぁ……！」

息をつく。
これで、全てが終わった。
仲間たちはどうなったのだ？
そんな事を考える。
その時だった。

「Ｅセンサーに反応！？」

新たな敵が、戦場に現れる。
それは、漆黒の機体。
幾度となく、自分の前に立ちはだかった男の機体と酷似している。

その背中から放出される赤いＧＮ粒子。

「フラッグのカスタムタイプ……あの男か……！」

そしてその予想は、的中した。

『逢いたかった……逢いたかったぞ……ガンダムゥ！！』

有視界通信から聞こえるのは、あの男の声。

グラハム・エーカーの声だった。

「く……！」

『待ち焦がれていた……君と出会えるのを！ハワードとダリルの仇、取らせてもらうぞ……この！』

ビームサーベルが赤い刃を展開し、エクシアへ向けて襲いかかる。

『ＧＮフラッグで！』

「く……貴様ぁ……！」

『なんと……君はあの時の少年か！　やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ…』

驚きに満ちた、それでいて歓喜しているような声が聞こえた。

『そうだ、戦う運命にあった！』

左腕が、ＧＮフラッグの斬撃で切り落とされる。

「ぐぅ……！」

『ようやく理解した。君の圧倒的な性能に、私は心奪われた…』

刃が交錯し、プラズマの奔流が巻き起こる。

『この気持ち……まさしく愛だ！！』

「愛！？」

『だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる！いきすぎた信仰が、内紛を誘発するように』

「…！それが分かっていながら！なぜ戦う！？」

『軍人に戦いの意味を説くは、ナンセンスだな！』

弾かれた二つの刃。

ＧＮフラッグのビームサーベルが、エクシアの頭部を貫き、そのまま虚空へと薙ぎ払う。

「貴様は歪んでいる！」

返す刀で、刹那はエクシアを横へ一回転させて、その勢いを利用し、残る右腕のＧＮソードで左脚を切り落とす。

『そうしたのは君だ！』

さらに返す刀で、ＧＮフラッグがエクシアへ右脚で蹴りを入れた。

『ガンダムという存在だ！』

「くぅ……！」

『だから私は君を倒す。世界などどうでもいい……己の意志で！！』

「貴様だって、世界の一部だろうに！」

『ならばこれは、世界の声だ！』

「違う！貴様は自分のエゴを押し通しているだけだ！」

確固たる意思をもって叫ぶ。

ならばーーーーー

「貴様のその歪み、この俺が断ち切る！」

「よく言った！ガンダムゥ！」

二機の刃が、両者を貫いた。

刹那の視界を光が包み込む瞬間ーーー羽が視界を舞った。

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「世界を止めて」（後書き）

あと一つ……！

感想、意見などお待ちしております！

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「そして、狙撃手は旅立った。」（前書き）

ようやくプロローグが終わる……

さて、いくとしますか。

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「そして、狙撃手は旅立った。」

ーーーーそして狙撃手は死に、新たな世界へ旅立った。

Ｓｉｄｅロックオン

「終わった……か……」

宇宙空間を漂う。
俺は、静かに目を開けた。
全ての過去への決着はつけた。

「あいつらは……無事かな……？」

そんな事を考える。

「ぐ……うぅ……！」

痛みが、全身を襲う。
脇腹に、金属片が突き刺さっていた。

「罰を……受ける時がきたらしいな……」

ロックオンは、力を振り絞ってコクピットから這い出ようとした。
それに気づいたハロが、ロックオンを呼ぶ。

『ロックオン！ロックオン！』

「なぁに……心配すんな相棒。」

ロックオンは、そうハロへと答える。

ーーーー悪いな相棒。でも、あいつらにこんな格好は見せられねえや……

「落ち着いたら、デュナメスをトレミーに戻せ……太陽炉を頼む……」

ハロへと手をかざし、撫でてやる。そうして俺は、身体をデュナメスから離れさせる。

『ロックオン！ロックオン！』

ハロの、必死に引き止めるような声が聞こえる。

「あばよ……相棒……」

別れを告げて、ロックオンは愛機から離れていった。
ロックオンの脳裏に、様々な記憶が蘇る。

十年前。全てが終わったあの日の光景が。
残骸があたりに散らばる。
後ろでは、黒い布に包まれた遺体が並べられていた。
その中には、変わり果てた家族もいた。

場面は変わる。

『よぉ、お前さんが新しいガンダムマイスターかい？』

ロックオンは、目の前に立つ少年へ向けて聞いた。

『あんたは？』

少年ーーー刹那・Ｆ・セイエイは、逆に問い返してきた。

『俺の名はロックオン・ストラトス。成層圏の向こう側まで狙い撃つ男だ。』

ロックオンは、刹那へ向けてそう答えた。

『俺は、それ相応の覚悟でここにいる。ガンダムで世界を変えるためにな。』

『ああ……』

ロックオンはそう言いながら、右手で銃を形作った。

『お前もそうなんだろう？』

「父さん……母さん……エイミー……」

脳裏に、懐かしい光景が浮かんだ。

それは、家族と共にやった最後のクリスマスパーティー。

脳裏に浮かぶ自分は、笑顔だった。

妹も笑顔だった。

母も、父も笑顔だった。

「分かってるさ……こんな事をしても……変えられないかもしれないって……元には戻らないって…」

誰にも聞かれる事のない独白。

「それでも……これからは……明日は……ライルの、生きる未来を……」

それは、果たして誰に向けた言葉なのか？

脳裏に、自身の存在意義に疑問を持ち迷っていた少年の横顔がよぎる。

脳裏に、自身の葛藤と戦い続ける青年の姿がよぎる。

脳裏に、仲間たちはの姿がよぎる。

脳裏に、あの利かん坊の姿が姿がよぎった。

「刹那……答えを……だせよ……お前は変わるんだ……変われなかった……俺の代わりに……」

虚空へと沈んでいくロックオン。

瞳に、青い惑星（ほし）が映り込んだ。

それは、自分が仲間とともに変えようとした世界そのもの。

俺は、その手を星へとかざす。

「よぉ……お前等……満足かぁ？こんな……世界で……」

こんな、争いだらけの世界で。

あんなやつを生み出しちまうような世界で。

あんなやつのせいで、刹那みたいなやつを生み出しちまうような世界で。

こんな、アレルヤやティエリアみたいなやつを生み出しちまうような世界で。

ミス・スメラギみたいな、悲しい過去を背負いながら、それを酒で薄めながら、それでも戦うようなやつを作り出しちまう様な世界で。

こんな、俺たちみたいな奴らを生み出しちまうような世界でよ……

……

「俺は……やだね……」

そしてーーーーーーー孤独な狙撃手はその生命を散らせた。

思いを、残った仲間へと託して。

新たな世界へ旅立った。

暗闇に包まれていく、意識。

ーーー俺が落ちるのは、地獄かな……

その時だった。

『助けて……！』

声が聞こえたのは。

これはーーー少女の声？

『助けて……！』

ーーー君は、一体……！？

最後にロックオンが目にしたものは、ピンク色の髪に黄色のリボンをつけた悲しげな表情を浮かべた少女だったーーーー

ＰｒｏｌｏｇｕｅＥｐｉｓｏｄｅ「そして、狙撃手は旅立った。」（後書き）

やってやる……やぁってやるぜ！！

お次はオルタネイティブプロローグ！

本編はしばらく先になるぜ……！

他の作品と似通ったりしちまうかな……結局、元の作品や他の作品のパロディ満載だしね……

感想、意見などお待ちしております！

Alternative story before01「もう一人の、科学者」

ーーーーーこれは、一つの挿話である。

◆　◆　◆　◆　◆

未だ、戦火の渦中にあるイギリスの隣、そこにあるアイルランド。
そのアイルランドの北東部に位置する孤島に、一件の広壮な屋敷が見える。

世界が破滅の危機に瀕していると言うのに、そこは波も風も穏やかで、やや陽射しは強いが透き通るような青空は、見る者を吸い寄せ、心に一瞬の空白を作り出してしまうほどに、深く、清く、美しかった。

その屋敷の一室に、一人の科学者がいた。
いくつものモニターに囲まれたデスクに座っている。

どうやらその部屋は、彼の研究室兼書斎のプライベートルームであるらしく、デスクの左側には山積みになった本が、左側には描きかけの油絵がイーゼルに立てかけられていた。

そに部屋にはもう一人、青年がいる。
青年は、かつては同じように科学を志した。

しかし、世界はそれを許さず、この屋敷の主よりも若かった彼は戦場に駆り出された。

今は、その証拠に国連軍の軍服を着、胸には衛士を示す証がある。かつては、才能を認め合い、競っていた。

彼らは、共通の趣味がチェスであり、互いに好敵手である事から親交も深かった。

部屋の主に勧められた椅子に座り、モニターと向き合っている科学者の背中を見つめていた青年が、おもむろに口を開いた。

「……意識を伝達する新たな原初粒子の発見、その特殊粒子を製造する半永久機関の基礎理論の構築……。そして、新理論に基づく最新型の量子型演算処理システムの提唱と発明。どれも、君の創り出したものは今の絶望的な戦いに希望をもたらす大変な技術だ。」

そこでいったん言葉を区切り、こちらを向かずモニターに向かっている科学者へ苦笑気味に続けた。

「……でも。君は人間嫌いで、こんな場所に一人で過ごしている。」

モニターに目を向けたまま、振り返りもせず科学者は応じる。

「……私が嫌悪しているのは、知性を間違って使い、思い込みや先入観にとらわれ、真実を見失う者たちだ。」

科学者は、口調に憂を込めて言う。

「このような情勢にありながら、未だにまともな対策を応じようと

しないアメリカ。そして、未だに東と西で別れているような国々……。

”信じ合わない”ということは、やがて不和を呼び、争いを生む……。わかりあわせたいのだよ、私は……」

彼の独白にも似たその言葉は、今の世界の事を示していた。

未だにアメリカは独自の意見を強硬に押し付け、ドイツは未だ西と東に別れ、存続するソビエトもまた人と人との関係が疑心暗鬼に満ちている。

科学者は、今は志を一つにして最大の敵に立ち向かい、危機を脱するのが第一の目標だと考えていた。

「それが、きみの求める”世界”か……」

「……人類は知性を正しく使い、進化しなければならない……」

そこで、科学者は振り向いた。

「そうしなければ、たとえ宇宙へ旅立ったとしても同じ結果をーーーー新たな争いの火種を生む事になる……それは、悲しいことだ……」

彼の言葉に嘘がない事は、その表情が物語っていた。

眼鏡をかけた初老の科学者の顔には、人類の未来を憂い、そこに生じるであろう戦乱と戦火の被害者たちを哀れむような、悲しみの色がたたえられている。

彼はーーー天才であるがゆえに、預言者のごとく人類の未来が見え

てしまうのかもしれない。
青年は、彼に共感したように薄い寂しげな笑みを浮かべて、科学者の名を呼んだ。
「……イオリア……」
科学者の名は、イオリア・シュヘンベルグ。
ここと は違う世界において、同じ考えを持ち、そして人類を一つにするために私設武装組織（ソレスタルビーイング）を創設した”科学者”……。
「時間だ。僕はそろそろ戻るよ。」
青年はそう言うと、時計を見てから座っていた椅子から立ち上がりこの部屋の出口へ向かう。
「ああ。生きて帰ってこれたら、その時はまたチェスの相手をしてくれ。」
科学者は、そう他愛もない事を口にした。
だが、その他愛のない事でさえ、この世界はそんな余裕さえ許さない。
「約束する。僕も、君と同じ道を歩みたかった。」
青年はそう言うと、ドアを開けた。
と、青年は「ああそうだ」と言って出て行こうとした脚を止める。
「言い忘れていたよ。君に聞きたい事があったんだ。」

青年は、そう言うと再びイオリアへ向き直る。
「君は、奇跡と言うものを信じるかい？」
唐突な質問に、イオリアは答える。
「奇跡、か……」
奇跡。限りなく0に近い確率の事が起こる事象。
今の世界情勢から言えば、昔のように平和な世界が戻ってくる、ということだろうか？
「近々、ここにある計画の責任者が来る。それは、人類を救うための計画だ。」
「それで？」
「僕も、その計画のメンバーにいる。といっても、サポートだけどね。」
青年は、どこか自嘲気味に言った。
「もし……もし君がまだ希望があると信じているなら、そこへ参加して欲しい。それだけが言いたかった。それでは、失礼するよ。」
青年は、言い終えると部屋を後にした。
残されたイオリアは、またモニターへと向き直る。
「希望、か。しかし私はまだーーーーー人を信じる事はできない……。」

４０歳のイオリア・シュヘンベルグは、一人そう呟いた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

これは、彼ーーーーーイオリア・シュヘンベルグが、”オルタネイティブ”と呼ばれる計画の四番目に参加する二年前の話である。

ーーーーー時に、１９９７年７月の事だった。

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃手の戦いが始まる。

プロローグ編開幕

異世界に降り立った狙撃手の戦いが始まる。

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃手・前編」

ーーーー狙撃手は、地獄へと降り立つ。彼はそこで何を見るのか？

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Muv－Luv Alternative Story Of －Snipers set foot in hell－

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃手・前編」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Sideロックオン

ーーーーここは？

最初に認識したのは、自分がまだ生きていると言う事だった。

ーーーー俺は、生きてるのか……？

俺はあの時、サーシェスの野郎と一騎打ちしてーーーーそして、死んだ筈だ。

だが俺は、ロックオン・ストラトスを取り巻く感覚は「死の感触」

ではなく、「生の感触」に支配されていた。

目を開く。

目の前には、無機質な機械類が並んでいた。

ここはーーーーコクピット？

身体に鈍痛が走る。

それに目をしかめながら、俺は身体を起こし、周りを見回した。

見覚えのある「場所」だ。

視界に広がるのは、見慣れたコンソールやモニター。

「……」

ここが「あの機体」の中ならある。そう考えながら探していると、

やはりというか？そこに「それ」はあった。

黄色い球体型の高性能端末「ハロ」。

幾多の戦場を共に戦った、「戦友」とも言えるやつだ。

「何が……起こってやがるんだ……？」

俺はそう疑問を口にしながら、「おいハロ！」とハロに呼びかける。

数瞬して、黄色い球体型の高性能端末は動き出した。

『ーーーーハロ、オキタ！ハロ、オキタ！』

目のような部分を点滅させて、ハロは俺に答えてくる。

「お前がここにいるって事は……ここはデュナメスの中か……」

慣れた手つきでコンソールパネルを叩く。
そうして機体を起動させ、メインカメラを作動させた。
モニターに映り込んだのはーーー海中。
座標は、丁度日本海の位置を差している。

「ここは、日本海……？なんだって経済特区の近くなんかに……」

コンソールパネルをいじりながら、他のシステムを立ち上げて機体を巡行モードへ移行する。

”キュイィィン……”

あの独特の音を立てながら、ＧＮドライブが作動した。
機体が徐々に上昇していく。
そして、海上へと出た。

「何がどうなってやがるんだ……」

俺はそう言いながら、とりあえず機体をその場所から移動させた。

Ｓｉｄｅロックオン Ｏｕｔ

◆　◆　◆　◆　◆　◆

そこは、文字通り地獄絵図だった。
街という街は破壊され、それを守ろうとした―鋼鉄の巨人（戦術機）もまた破壊された。

ところどころでは黒煙が立ち上り、戦術機であったものの残骸と街と人の骸が残されるのみ。
逃げ遅れた人々は皆、異形の怪物に踏み潰されるか食われるかした。

ベイルアウトした衛士は、それだけで哀れだ。
残るのは、機体に格納してあった自動小銃か、それがなければ小さな自動拳銃しかない。
それがなくなれば、後は丸腰で逃げるしか道はない。
民間人なら、負傷兵ならもっと哀れだ。
彼らは逃げることしかできない。

逃げ惑うそれらを守るようにして、数体の巨人が異形の怪物の前に立ちはだかった。
それは、戦術歩行戦闘機と呼ばれるこの世界の人類を守りたる「剣」。
肩に日の丸を描くそれは、日本帝国軍所属の７７式戦術歩行戦闘機「撃震」と呼ばれる機体だった。
それらが、一斉にその手にもつ大型の銃――突撃砲を異形の怪物の大群に叩き込む。
それらが大群めがけて飛翔し命中。
怪物は血飛沫をあげて吹っ飛ばされた。
しかし、奴らの進行は止まるそぶりを一切見せない。
仲間の屍を容赦なく踏み潰しながら。

１９９８年７月初頭。
重慶ハイヴより進軍してきたＢＥＴＡの集団が、北九州に上陸。
ここから、日本本土における熾烈な戦いが始まった。
当初想定されていた以上の物量と展開を見せたＢＥＴＡに、本土防衛軍は浮き足立ち戦線は瞬く間に瓦解。
九州・中国・四国地方は蹂躙され、支配権をＢＥＴＡに奪われてし

まった。

死傷者・行方不明者の数は、３６００万人に昇る。

そしてＢＥＴＡは、上陸から僅か一週間で帝都・京都目前にまで侵攻。

以来一ヶ月に及ぶ熾烈な戦いが始まった。

そしてーーー１９９８年８月１４日。

この日、京都防衛戦は終わる。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー京都、防衛ラインＢーーーーー

帝都・京都。

最強の布陣で待ち構え、幾重にも敷かれた防衛ラインはしかし、全てを蹂躙し破壊していく災厄の前には何の役にも立たなかった。

最強の部隊たる帝国斯衛軍。

そして、帝国本土防衛軍。

これだけの戦力を揃え迎え撃ったのにも関わらず、一ヶ月に及び続けられた京都防衛戦における戦況は一向に好転せず。

その影響で、戦力はその半分以上を削られていた。

『う、うわあああああ！！』

誰かが、悲鳴をあげた。
ここを守る日本陸軍の戦術機甲連隊。
そこに当てられた中隊の隊員は、そのほとんどが若く、この戦いが初陣であった。
中には古参の衛士もいたが、慢性的な成人不足のために衛士の大半はまだ皆若い。
この中隊もまた同じで、彼らの部隊はもともと１６機の撃震で編成されていたが今はその数を７つにまで減らしていた。

『ひ…！も、もう残弾が残りわずかです！もちません…！』

部隊の一人である女性衛士が諦めにも似た悲鳴をあげる。
この女性もまたまだ若く、戦闘はこれが初めてだ。

『こんな．．．．．！倒しても倒しても湧いてくるって．．．．．．！』

彼女の言う事は最もだった。
ここを守る部隊の一つ、グリーン中隊の戦術機七機に対し、相手は推定で１７０体以上いる。
他の部隊の惨状も似たようなものだった。
全滅した部隊だっている。
ゆえに、誰が見てもこの防衛線を死守し、かつ進行を停滞させるための戦闘継続は、これ以上無理だった。

『まだだ！諦めるな！』

『その通りだ。たとえ無理でも、やれる事をやるんだ！わかったなヒヨッコ！』

古参の衛士が、若い衛士達を激励する。
絶望的な状況下。
だが、彼らは諦める訳にはいかなかった。自分たちの後ろには将軍が、皇帝がいる。
しかしそこへ、耳を疑うような通信が入ってきた。

『こちら、前線司令部。Ｂ地点における防衛ラインは放棄する。残存部隊は最終防衛ラインへ後退せよ。』

突然の放棄命令。
ここを守る部隊全員に、その命令がくだされる。
誰しもが一瞬言葉を失った。

『ーーーーふざけるな！こんな状況で後退しろだと！？自殺行為だ！』

『グリーン０１より前線司令部。支援砲撃は期待できるのか？このままじゃ全滅必至だぞ。』

『それはできない。そちらは現戦力で対処されたし。武運を祈る。』

そこで、通信が切れる。
グリーン０１は、拳をコンソールに叩きつけて唇を噛み締めた。
目の前はＢＥＴＡの大群が押し寄せ、弾薬は心許ない。

『くそったれが……言われなくともやってやるよ……』

これだけ減らしてもモニター越しに見えるのは、こちらへ接近してくる要撃級、突撃級、戦車級の大群だった。
それらは前座で、７０と数は少ないが、厄介な事に戦車級が３０だ。
その後ろには、光線級４０に重光線級５が控えている。

『く…！現時点よりＢラインを放棄。残存部隊は最終防衛ラインであるＡラインへ後退する。』

グリーン中隊の隊長機が、他の部隊へ撤退する旨を伝える。

『全機、我に続け。何としても生き残るぞ！』

グリーン０１が全部隊へ通達する。

その時だった。
突然、電子機器にノイズが走り始めた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

「こいつはひでぇな……」

俺の視界には、一面に広がる廃墟が広がっていた。

崩れた建物。
なにかもわからないような肉片。

ところどころに散らばる人だったもの。
ところどころで黒煙をあげている、ＭＳに似た兵器。
そして、どれもがあたらしいものだった。

『戦闘反応探知！戦闘反応探知！』

「だろうな……ハロ、場所は？」

俺がそう聞くと、場所はすぐ近くだという事がわかった。
メインカメラを最大望遠でその方向へと向ける。
そこでは、何かに追い詰められつつある何機もの見たことないＭＳが見えた。

「何かと戦っているのか……？」

ペダルを踏みもうとして、俺は一瞬だけ逡巡した。
わけもわからない状況で、自分は今、戦闘行為を傍観している。
だが、ここで果たして自分は戦闘に武力介入してもいいのだろうか？

「聞こえるかミス・スメラギ！」

コンソールパネルを叩いて、プトレマイオスにいるはずのスメラギ・梨・ノリエガに通信を入れる。
しかし、モニターに表示されるのは「通信不能」の文字だった。

ーーーどういうことだ？

「リンクが死んでいる…？くそ…！おい刹那！アレルヤ！ティエリ

ア！誰でもいい！おい！返事をしてくれ！」

他のメンバーへのコンタクトを図るが、結果は同じだった。
モニターに表示されるのは同じ「通信不能」の文字。
他のメンバーとのコンタクトは、全て取れない。

「どうなってやがる…！」

全くの孤立無援だ。
状況がわからなさすぎる。
それに、ここが地球だとしたら、あまりにも変わり果てすぎていた。
兵器のレベルが21世紀とほとんど変わらないし、追い詰められている部隊が戦っているのは特撮にでてくるような「怪物」だ。
人型機動兵器はあるにはあるがーーーそれはお世辞にも見た目からして「高性能」と呼べるほどの外見はしていない。
どれもが鈍重なイメージのものばかりだ。
推測するに、自分は過去に遡ったのか？
もしくは、自分のいた世界とは別の異空間にきてしまったのか？

「どうすればいい……俺は……」

『ロックオン！ロックオン！』

自分は、死んだ筈の人間だ。
それが生きているという事だけでも立派におかしい事だ。

「だったら、なにが起きてもおかしくねぇか……なら、俺は俺個人の意思でやるぜ……」

『ドウスル？ドウスル？』

「決まってるだろう？いくぜ、ハロ。」

ロックオンはそう言うと、機体を急加速させた。
高速で飛行しながら、ＧＮスナイパーライフルを抜く。

「ロックオン・ストラトス、目標を狙い撃つ！」

ライフル型コントローラーを構え、異形の怪物を捉える。
そして、トリガーを引いた。

一発。

二発。

三発。

四発。

放たれた四つの光弾が、突撃級の息の根を一瞬で止めた。

Ｓｉｄｅロックオン Ｏｕｔ

◆

◆

◆

◆

◆

◆

ーーーーその光景を見た私は、何を思ったのだろうか？

ーーーー圧倒的な力。

ーーーーそれをもって、人類の宿敵を倒していく様は、

ーーーーまさに「神」そのものだった。

ーーーー濃緑の狙撃手。

ーーーーそんな、後ろ姿は、どこか儚く悲しげなものだった。

『グリーン０６！避けろおぉ！！』

通信機越しに仲間の声が届く。

眼前に、突撃級の鋭い衝角が迫っていた。

『え……？』

そして、迫っていた四体の突撃級がーーーー突然「何か」に射抜かれた。

ーーーーあれは何だ？

『なんだ！？』

『空からの攻撃！？』

『援軍・・・・・・・・・・・・？』

仲間たちが、口々に突然の「何か」の来訪に対する疑問を口にする。

『あれ、は……』

彼女がその時目にしたのは、空に浮かぶ濃緑の狙撃手だった。

直後、仲間との通信が途絶した。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

「まだまだ！」

デュナメスが空を翔ける。
俺は、大きな前腕をもつ化け物へとＧＮスナイパーライフルの照準を合わせた。
そして、再びトリガーを引く。
放たれた粒子ビームは、正確にその怪物を射抜き、殺した。

「ハロ、ＧＮ粒子の散布中止！全ての出力を、火器管制にまわせ！」

『了解！了解！』

「うおらぁ！」

左手にＧＮスナイパーライフルを持ち替えると、デュナメスの右手にビームサーベルを持たせる。
地面に降り立った濃緑の機体。
それに、二体の要撃級が突進する。
前腕を振り上げて、新たな「脅威」を、全力をもって粉砕しようとした瞬間ーーーーー二体の両腕が切り裂かれた。

「見た目通り、ただの野蛮な怪物か……これじゃあハンティング気分だぜ……！」

俺はそう吐き捨てると、二体の要撃級を左手のＧＮスナイパーライフルで射抜く。

動きを止め、血飛沫をあげて崩れ落ちる要撃級。

『そこの機体！』

不意に、オープン回線から音声だけだが男の声が聞こえてきた。

『突然の救援には感謝する！だが、その前に所属と管制名を名乗れ！』

俺は、その声の主が、あのＭＳもどきのパイロットだということにようやく気づいた。

『ありがたいが、我々は貴官の救援を聞いていない！』

「悪いが、今は答えらないんだがね……」

俺は、そう男へ返答する。

「そんなことより、今はそんな状況じゃないだろう？」

俺がそう言うと、ＭＳもどきのパイロットは一泊おいてから返事を返してくる。

『・・・・・・・了解した。深くは聞かないことにしよう。こん

な状況だしな。だが、礼だけは言っておく。部下を助けてくれてありがとう。』

「やけに聞き分けがいいなあんた。」

『こんな戦場だ、何が起こってもおかしくないって事だよ。それに、あんたは詳しく詮索されたくないんだろ？』

「ああ。」

俺はそう答えながら、デュナメスを後方へと下げた。
突出していたデュナメスが、ＭＳもどきーーー撃震の横に着地する。
ＧＮスナイパーライフルを肩へと懸架すると、ふくらはぎに装着されたコンテナからＧＮビームピストルを取り出した。
放たれる光弾が、迫る戦車級を吹き飛ばし、動きを鈍らせる。

『光線兵器・・・・・！？そんなものが実用化されてるなんて聞いていないぞ・・・・・！』

「悪いな、そいつは企業秘密だ。」

デュナメスの武装であるＧＮ粒子を用いたいわゆる「粒子光線兵器」。
このＭＳもどきを見れば分かるように、デュナメスが装備しているようなビーム兵器なんかは実用化されてるわけがない。

『・・・・・深くは聞かんと言ったからな。余計な詮索はこの際無しにしよう。さっきそう言ったからな。』

「感謝するよ！」

俺は、そう言うと同時に愛機を空へ飛び上がらせた。
瞬間、ノイズ混じりに通信機から男の怒声が聞こえてくる。
『馬鹿野郎！こんな状況で空に上がったら……』
「一体何がーーーー」
『ロックオン！ロックオン！』
突然、警告をつげる警報（アラート）が鳴り響き、ハロが危険を知らせてきた。
「何！？」
突如として、デュナメスに無数の光線が襲いかかる。
「あれはーーービーム兵器！？」
自分へ向けて放たれたのは、明らかにそれの類のものだった。
ビームではない……まさか、レーザー兵器だと！？
『信じられねえ……！』
MSもどきのパイロットは、今の無数のビームよりも、それをすんでの所で回避したロックオンとデュナメスを見て驚いている。
『サラニ、エネルギー反応アリ！サラニ、エネルギー反応アリ！』
「あのデカ目野郎か……！」

メインカメラに映る赤アリもどきの大群。
その後ろに、醜悪な外見の大きな目を持った怪物が何体もいた。
『降りろ！奴らは、空にいるもの全てを消し去る！』
男が、焦った声で警告してきた。
飛行するためにＧＮ粒子を散布しているため、通信にノイズがかかっているみたいだ、
「おいあんた。」
俺は、通信を外部スピーカに切り替えてＭＳもどきのパイロットに聞く。
『なんだ？』
「あのデカ目のレーザーは、連射が聞くか？」
『レーザー…？光線級のレーザーのことか……？』
あれだけの熱量だ。
それを用いるのが機械ではなく生物兵器であれば尚更の問題。
「早く答えろ！」
俺が催促すると、男はすぐに返事を返してきた。
『あ、ああ…！やつらは、小型のと大型のがいるだろう？小型が光線級で、大型が重光線級だ。それぞれのレーザー照射の照射間隔（インターバル）は、光線級が１２秒、重光線級が３６秒だ。』

やはり、欠点はあった。
一度目のレーザー照射のあとの充填時間(タイムロス)。
「OK。それなら、俺が光線級を掃討して退路を開いてやる。あんたらその間に逃げろ！」
撤退命令がでているのはハロを通じて知っている。
俺の提案と言うか、半ば命令に男は異を唱えてきた。
『だが、たった一機では危険だ！』
そう。彼らから見れば、それは「自殺行為」と同じなのだ。
だがそれは、男や男の仲間が乗るMSにおいてのこと。
俺が乗っているのは、「ガンダム」だ。
「こいつなら、あんたらの撤退の時間稼ぎくらい楽勝だ。さあ行け！」
『く・・・・・・！すまん・・・・・・！』
MSもどきが方向転換するのを見届けると、俺は戦場へと視線を戻した。
『高熱源体接近！』
「またか！」
無数のレーザーが、再びデュナメスを襲う。
ロックオンは巧みに操縦桿を動かし、その攻撃を紙一重で回避して

いた。

「当たるかよ……！ハロ、マーキングだ！照射のインターバルでデカ目野郎を掃討する！」

『了解！了解！』

「その程度でおれとデュナメスを止められると思うなよ……！トランザム！！」

ー【ＴＲＡＮＳ－ＡＭ】ー

赤色に発光したデュナメスが、
戦車級と要撃級、突撃級の大群を蹴散らして、光線級の大群に突進する。

「俺は早撃ちも得意なんだな、これが！」

ＧＮビームピストルを抜き、マルチロックした光線級数体を瞬時に射抜いた。
光弾に弾痕を穿かれた光線級が、次々に倒れていく。

「うおおおお！」

さらに数体を射抜き、地面へ右足を擦りながら急制動をかけ、着地。
一瞬でＧＮビームピストルをマウントすると、ＧＮスナイパーライフルを肩から抜いて構えた。。

「……！！」

残像を残し、ライフルの銃身が横薙ぎに振られた。
ＧＮスナイパーライフルから放たれた矢が、五体の重光線級を瞬殺する。
崩れ去る五体の重光線級。
インターバルを終えた光線級数体が、デュナメスへ向けて猛烈なレーザー照射を放ってきた。
しかしそれはーーーーデュナメスの全面に展開された緑色の壁に阻まれる。

ＧＮフィールド。

物理的な攻撃でなければ、ほとんどの攻撃を阻む堅牢な盾。

「その程度かよ・・・・・！」

高速で迫るデュナメスに、光線級達は本能的な「恐怖」を抱いた。
普段なら、なにも考えない筈の彼らが「恐怖」を抱いた理由は誰にもわからない。
「恐怖」にかられた光線級が、インターバルを終えて再びレーザーを一斉照射する。

しかしそれはーーーー当たることはなかった。
ＧＮ粒子の残照を残して、射線上デュナメスはいない。

「甘いんだよ。」

『■■■■■■■■■！！？』

光線級の眼前に、デュナメスがいた。
咄嗟に飛びのこうとするが遅い。

「所詮はーーーーーーーーー見た目通りの怪物か。」

ロックオンが吐き捨てる様に言う。

次の瞬間、光線級は光の矢に貫かれたーーーーーー。

（推奨ＥＤ：ＴＨＥ　ＢＡＣＫ　ＨＯＲＮ／罠）

感想、意見などお待ちしております。

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃

大幅に修正。
第三話「邂逅」前・中編を統一し第二話後編へ変更。
２０１１／１１／２５

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃

ーーーーーそれは、人類史上最も熾烈で凄惨な戦いだった。
否。果たしてそれは、戦いと呼べたのだろうか……？

◆　◆　◆　◆　◆　◆

１９９８年８月１４日２２２０、京都八坂祇園付近ーーーーーー

Ｓｉｄｅ月詠真耶

帝都が、今目の前で炎に包まれ燃えていた。
空はどこまでも漆黒の闇に包まれ、眼前の帝都は紅蓮の炎に包まれている。
炎は、その灯りをもって闇夜を焦がし、低く垂れ込めた重金属雲を鈍く照らしていた。
そして、足元でまた一つ火の粉が爆ぜ、私ーーーーー月詠　真耶の乗る戦術機、紅の８２式戦術歩行戦闘機《瑞鶴》を一層紅々と染めあげた。

「確実に押さえよ！まだここを抜かせるわけにはいかんぞ！」

私は僚機を叱咤しながらも、操縦桿を巧みに動かし、トリガーを引く。
残り少なくなった３６ｍｍ砲弾は突撃砲の銃口から発射され、放た

れた弾丸は的確に敵へと叩き込まれていく。

ーーーーーーBETAは火砲を用いない。

脳裏に、昔聞いた言葉が浮かんだ。

それは同時にーーーー皮肉にも、眼前の帝都を燃やしているのは、BETAからここを護らんとした人類の手によって撃ち込めれた鉄と炸薬によるものだという現実を己自身に突きつけていた。

本来ならば、皇帝を守り、将軍を護り、何より民の盾となるべき帝国各軍がーーーー自らの手でBETAに先んじて灰燼に帰さんとしている。

これほどの皮肉があるだろうか？

「（許せ、京都よーーー我らはそれでもなお、民を護らねばならぬのだ・・・・・・！）」

私はそう内心で言い、愛機を走らせた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

1998年7月初頭。

ここから始まった本土防衛戦は、当初から人類側が圧倒的不利な状況で続けられていた。

BETAの大群は、上陸から僅か一週間で帝都・京都目前にまで侵攻。

以来一ヶ月に及んだ京都防衛戦は、今宵その最終局面を最悪の幕切れで迎えようとしていた。

前日に舞鶴港が陥落した時点で、京都の山陰側の守りは潰えたも同然だった。

帝都市街の狭き西門となる亀岡盆地からのＢＥＴＡ侵入を少なからず削っていた亀岡周囲山中の砲兵・戦術機甲部隊も遂に壊滅。

あとは、決壊したダムから流れ出た激流と同じ原理で、ＢＥＴＡの大群はいとも簡単に最終防衛戦を食い破り、ここに敗北は決定した。

放棄が決定された帝都市街地に、琵琶湖のアメリカ太平洋第七艦隊と大阪湾に展開する帝国海軍の連合艦隊艦艇から砲撃が行われる。

灰燼に帰した京都。

物語は、今宵この最悪の結末からはじまる．．．．．．

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ａｌｔｅｒｎａｔｉｖｅ　ｓｔｏｒｙ　ｂｅｆｏｒｅ０２「地獄に降り立つ狙撃手・後編」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

どこもかしこも廃墟だった。
ハロに戦域の情報を調べさせた所、どうやらここを守る部隊は「ここ」ーーー京都を放棄して撤退するらしい。
あの戦闘への介入からすでに5時間。
空は一層暗くなり、京都を包み込む炎が空を薄っすらと照らしていた。

「あんまり・・・・気分がいい光景じゃないな・・・・・」

その光景を見ながら、俺は一人そう呟いた……。

◆

◆

◆

◆

◆

◆

轟音が鳴り響き、京都の街を包む炎の勢いが強くなる。

その中で蠢く異形の集団ーーーーーBETA。

その前に、14機の戦術機が立ちはだかった。
跳躍ユニットが噴射音を轟かせ、瑞鶴数機が地面へ着地する。
その中の一機、紅の「瑞鶴」に乗る真耶の視線の先の光景は、彼女に誰もが思うような「終わり」を連想させた。

◆

◆

◆

◆

◆

◆

Side真耶

「これで・・・・・・幕切れとなれば良いがな・・・！」

私は、本音を漏らしながら眼前に迫る突撃級の攻撃を、操縦桿を動かして回避した。

”ゴォウ！！”

隣を通り過ぎる突撃級を一瞥。

直後、一瞬で背後へ回り込み、残された最後の１２０ｍｍ散弾を、返す刀で放ちながら後退する。

網膜モニターに血飛沫をあげる突撃級の姿が映り込んだ。

低噴射跳躍を駆使して、残った補給コンテナの横に着地する。

「０２弾倉交換！援護を頼む！」

『了解！』

残弾は残り少ない。そしてまた……補給コンテナもここにある数個を除いてもう来ない。

弾薬を補給。空の弾倉を外し、突撃砲に新たな弾倉を込めて再び戦列に加わる。

「く・・・！」

『少尉、そろそろ来るぞ！』

僚機から通信が入る。

そして、次の瞬間。

”ドドドドド……！！”

後方から特徴的な甲高い風切り音が闇を貫き、一瞬の後に轟く爆裂音が紅蓮の炎に更なる輝きをもたらす。

それはーーーーーー

「やってくれるな・・・！」

米軍の第１０３戦術歩行連隊から放たれた誘導ミサイル、ＡＩＭ－５４《フェニックス》だった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ第１０３戦術歩行連隊《ジョリーロジャース》

同時刻。

撤退を命じられた米軍は、琵琶湖に展開する第七艦による最後の攻撃が行おうとしていた。

『ジョリー・ロジャース各機より帝国斯衛軍（インペリアルロイヤルガード）へ。これよりＡＩＭ－５４（クス）による最後の攻撃を行う！』

『全機、配置につきました！』

米軍第１０３戦術機連隊のＦ－１４《トムキャット》が、その肩に

装備したＡＩＭ（フェニックス）－５４を構える。

『ーーー第１０３戦術機連隊より帝国斯衛軍。これが最後の手土産だ。武運（グッドラック）を祈るっ！！全機、砲撃開始！撃てぇ（ファイヤ）！！』

号令と同時に、７機のトムキャットからＡＩＭ（フェニックス）－５４計２８発が発射された。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ斑鳩

「ＢＥＴＡ共の攻勢は・・・やはり防ぎきれぬか・・・！」

私ーーーー此度の戦いにおいて殿を任された斑鳩　悠眞は、苦い表情を浮かべながら戦場に立っていた。

部下や、臨時的に我が部隊へ編入となったホーンド０２・月詠　真耶らと同じ機体ーーーーー機体色は五摂家の一つを示す「蒼」ーーーー「瑞鶴」に乗って。

私は、瑞鶴を駆りＢＥＴＡの進軍を防ごうと立ちふさがる。

『閣下、第９６砲兵大隊の離脱を確認ーーー頃合に御座います。御下知を！』

傍らの紅き瑞鶴からオープンチャンネルで通信が入る。

ーーー我が役目は、ここに留まり死することにあらず。

「ーーーーうむ。月詠、そなたの意見に変わりはないな？」

『ございません、閣下。我らは帝国の守護者、瑞鶴は全ての刃に御座います。民に生き恥を晒して尚、我らは生きて戦い続けねばなりません』

この会話は、ここにいる全隊に聞かせるためのものである。
一部のものには「玉砕」をもって是とする空気も、今はこの場にない。
皆が、生きて戦い続ける意思を見せていた。
ここを、「日本」という国をＢＥＴＡから取り戻す日を迎えるために。

「ーーー然り。我ら摂家の不始末にて迷惑を掛ける、この罪はいずれ問われようーーーされば月詠、全隊に通達せよ。魚鱗参陣（スケイルストライク・スリー）、我らは下京北の光線級を排除した後、路上より山科、大津へ撤退する。」

『はっ！』

凛とした声が響く。

「ならばゆくぞ。全機着剣！！」

号令と同時に、瑞鶴１４機が一斉に長刀をその手にもつ。
私はは、瑞鶴のもつ長刀の切っ先をＢＥＴＡの大群へと向けた。

「皆の者、これが最後の攻勢ぞ！殿を預かる我が近衛の戦い、この千年の都に刻みつけてゆけい！！」

『『『『御意に！！』』』』

轟音を轟かせ、帝国近衛軍第十六大隊所属の瑞鶴１４機による最後の攻勢が開始された。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー第十六大隊の突撃より数分後ーーーーー

燃え上がる京都の街より少し離れた場所にある森林。。

そこに、一体の巨人が姿を周りの風景に溶け込ませて身を潜めていた。

否、それは戦術機ではない。

この世界とは違う世界の人型機動兵器（モビルスーツ）だ。

光学迷彩で身を潜めているのは、ＧＮ－００２《ガンダムデュナメス》。

それに乗るパイロットーーーロックオン・ストラトスは、そこでハロを使っての戦場の状況把握行っていた。

状況は考え得る中で最悪のものらしい。

京都を守る部隊はその戦力の大半を失い、ここにいた「将軍」とやらも後方へ後退。

京都を守っていた部隊の残存部隊は撤退し、モニターに映る戦闘はさしずめ殿による最後の攻勢といったところか？

ロックオンは、機体の光学迷彩を解除する。

漆黒の闇の中に、濃緑のＭＳが現れた。

「ハロ。システムを隠密巡行から戦闘モードへ移行しろ。武力介入を再開する。」

『了解！了解！』

操縦桿を動かし、機体を漆黒の空へ飛翔させる。
飛翔したデュナメスは、マニュピレーターを動かして右肩に懸架されたＧＮスナイパーライフルをその手に持った。
ロックオンはコクピット上部に格納されたライフル型コントローラーを下ろして構える。
同じように、デュナメスも狙撃の構えをとった。
緑色のレティクルが表示され、瞳に醜悪な外見のＢＥＴＡが映る。
レティクルの十字カーソルがそれをロックオンし、緑から赤の表示へと変わった。

「行くぜハロ！撤退を支援するぞ！デュナメス、目標を狙い撃つ！！」

引き金を引く。
そして、ＧＮスナイパーライフルの銃口から粒子ビームが放たれたーーーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆

戦場を、蒼き８２式戦術歩行戦闘機「瑞鶴」が駆け抜けた。
長刀を腰だめに構えて、迫る要撃級を横一文字に薙ぎ払う。

血飛沫をあげて要撃級が崩れ落ちた。

「ホーンド０１よりホーンド各機へ。障害となる光線級を掃討後に橋まで後退する！死ぬなよ！

『『『『御意！』』』』

斑鳩が大隊各機へ指示を出す。

そして、大群へと突進した１４機の瑞鶴が、立ちはだかる要撃級・突撃級・戦車級を蹴散らして光線級の群れへ向かった。

直後。

醜悪な集団が左右へと分かれた。

ーーーーー光線級によるレーザー照射の予兆。

『閣下！レーザー照射が来ます！』

「わかっている！」

斑鳩は各自に通達し、タイミングを図る。

次の瞬間、視線の先が光った。

「全機、乱数回避！！」

斑鳩の号令と同時に、瑞鶴１４機が各々で跳躍ユニットを点火し、散開した。

彼の号令は、正に絶妙のタイミングだった。

全機が回避成功し、ＢＥＴＡ自身が作ってくれた道を駆ける。

ここにきて、勝利の女神は人類側に微笑んだーーーーー

「よし、全軍このままーーーーー」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーかのように見えた。

”ビー！ビー！”

斑鳩の耳元で警報が鳴り響く。
それは、斑鳩の乗る瑞鶴の跳躍ユニットが限界を迎えたことを告げるものだった。
網膜投影越しに、跳躍ユニットが限界を迎えた事を示す警告が表示される。

「・・・・・！こんな時に・・・・・！」

そして次の瞬間ーーーーーー

”ボッ……ドゴン……！！”

跳躍ユニットが小爆発を起こした。

「くぅ……！」

衝撃。
黒煙が所々から登り、次いで限界を迎えた跳躍ユニットが残った少しの燃料を引火させて爆発を起こす。

「ぐぅ・・・・！」

たった数秒間の出来事だった。

炎上する跳躍ユニットをパージする間もなく。
管制ユニット内を激震が襲い、次いで瑞鶴が前のめりに地面へ叩きつけられる。

『閣下ぁ！』

斑鳩の耳に、月詠が悲鳴が聞こえた。
体勢を崩し、立ち上がろうとする斑鳩の瑞鶴へ、突撃級の衝角が襲いかかる。
再び衝撃。

「ぐあああぁ！！」

機体が揺さぶられ、瑞鶴が吹っ飛ばされる。
そして次に網膜投影越しで見えた景色に……要撃級が映っていた。
突撃級の横から現れ、瑞鶴にトドメを刺すべく前腕を振り上げている状態で。

「指揮官が・・・・こんな体たらくとはな・・・・・！」

痛みを堪えながら、斑鳩はどこか自嘲するように呟いた。
死神の鎌が振り下ろされる。

”ーーーービシュン！”

”……！ドゴォ……”

だが、要撃級の前腕が瑞鶴を貫く事は無かった。
音声が、何かが倒れる音を拾う。

見れば、こちらへ腕を振り下ろそうとしていた要撃級が崩れ落ちていた。

何者かによって要撃級が撃破されていたのだ。

次いで、桃色の閃光が斑鳩へと接近していた突撃級二体を貫いた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

斑鳩を助けた別方向からの射撃。

それは、ロックオン・ストラトスの乗るガンダムデュナメスのＧＮスナイパーライフルから放たれたビームだったーーーーー

Ｓｉｄｅロックオン

「ハロ！あのＭＳもどきを助けるぞ！」

俺は、ＭＳもどきを破壊しようとしていた数体の化け物を行動不能にしたことを確認してハロへ指示をだした。

『了解！了解！』

「邪魔だてめえら！」

俺は、レティクルに捉えた一体ーーーーー頭に大きな衝角をもつ奴

ーーーーを狙撃する。
そして、すぐさま次の目標に切り替えてトリガーを引いた。
「早く助けてやれよ・・・・・・！」
スコープ越しに見える戦場。
倒れたＭＳもどきに、同じタイプの紅いＭＳもどきが駆け寄っていく。
それに群がる化け物共。
『ロックオン！ロックオン！』
「わかってる！援護するぞ！」
俺は、さらにトリガーを引いてＭＳもどきを援護する。
「接近戦をかける！ハロ、サポート頼むぜ？」
『了解！了解！』
バーニア噴射。ＭＳもどきに群がる化け物を蹴散らしながら、その前にデュナメスを躍り出させる。
『な・・・・！？援軍！？』
ハロが音声を拾い、ノイズ混じりでヘルメット内臓のヘッドセット越しに女の声が聞こえた。
俺は通信を有視界から外部スピーカへ切り替える。
「聞こえるかそこの機体！」

俺がそう問うと、数秒して返事が返ってくる。
相手も外部スピーカに切り替えたようだ。
『な、なんだ貴様は！？援軍など聞いてーーーー』
『救援感謝する。』
女性パイロットの方が突然の自分の来訪に対する疑問を言おうとし、
それを男の声が遮った。
おそらく、損傷した方のパイロットだろう。
『か、閣下！？』
『部下が失礼した。』
「閣下……？無事ではあるんだな。なら、あんた達は直ぐに撤退しろ。」
閣下、ということは部隊指揮官か何かだろう。前線に将官クラスの軍人はあまりでてくる筈はないしな……。
とりあえず俺は、男へ撤退するよう促す。
男の乗る機体は、どの道長く戦う事は出来ない。
『・・・・・・・・・・・・』
「さっき通信を傍受した。殿の役目は、とうに終えてるだろう？」
介入する前にハロが拾ったここの軍の通信記録と、簡単な戦域情報から察するに、こいつらの役目は時間稼ぎを目的とした殿であり、

役目は終わってる筈だ。

『ーーーーそうだ。』

「なら、早く逃げちまえ。命あっての物種だろう？」

『ああ。だが腑に落ちない点がある。貴官は何者だ？』

当然の問いだった。

撤退命令が出ているのにも関わらず、目の前に単機で現れたのだ。

「……」

『それに、私は貴官が使用している兵器を見た事がない。』

「……悪いが、今はそんな事言ってる場合じゃないだろう？少なくとも、俺にはあんた達と戦う意思はない。」

俺は答えをワザとはぐらかすように言う。

まあ……確かに怪しさ全開だよな。

『・・・・・・・了解した。』

「……やけにあっさりと了解してくれたな？」

拍子抜け、という感覚だ。

『それでも、貴官が私を助けてくれた事に変わりはない。だが、戦

闘終了後には我々に同行してもらうぞ？』

……まあ、当然だよな。
条件付きの信頼ってやつか……。

「了解だ。」

『……月詠！全機へ通達せよ。ただちに撤退せよとな。』

男は、部下である紅い機体の女性パイロットに命令を出した。

『後を頼む。』

男はそう言い、紅い機体とともに後退した。
損傷しているため、他のＭＳもどきよりも速度が遅い。
それに、要撃級と戦車級、突撃級が追いすがってきた。

「デュナメス、支援攻撃に移る！」

『了解！了解！』

それに並走する形で、俺はデュナメスを後退させた。
機体の方向は、敵を向いている。
ＧＮスナイパーライフルで、先頭の戦車級を蹴散らした。
吹き飛ばされる戦車級の骸を跳ね除けて尚向かってくる要撃級や突撃級。
それへさらに光弾を叩き込む。

「ハロ、トランザムは！？」

『圧縮粒子充填中！圧縮粒子充填中！』

「まだ使える状態じゃねえか・・・・・」

ここを打破するために切り札を切ろうとするが、粒子残量の問題で断念する。

と言っても、諸刃の剣のため、そう何度も使うわけにもいかないが……。

そういえば、こいつには破壊力が大きい武装が一つあったんだったな。

「ハロ、ＧＮミサイルの残弾はいくつだ？」

腰部と膝部分に格納されているＧＮミサイルの残弾を聞く。

ほどなくして、全弾ある事が確認できた。

「よし……なら、前方の頭でっかちにＧＮミサイルを撃て！」

『了解！了解！』

腰部のウェポンラックの一つが開き、瞬間、３発のＧＮミサイルが発射される。

目標（ターゲット）は前方の頭でっかち（突撃級のこと）。

放たれたＧＮミサイルは、突撃級めがけて突撃し、下から突き上げる形で、三体の突撃級を吹き飛ばした。

次いで、後ろから来ていた突撃級や要撃級が爆発と吹き飛ばされた突撃級に巻き込まれて動きを大きく阻害される。

さらにそこへ、ＧＮスナイパーライフルによる射撃を叩き込んだ。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅーーーー

『ーーーーーーーーー』

状況を傍観・・・・・・いや、情報として受け取っていた”上位存在”。

場所を得るために上位存在が放ったＢＥＴＡ達は、たった一つの”異物”によって少なからず被害を受けていた。

『ーーーーーー』

”彼ら”ーーーーーＢＥＴＡの一団は、上位存在からの後退命令を受け、方向を変えて、その場から離れていった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

「振り切ったみたいだな・・・・・・」

橋が落ちるのを見ながら、俺はそう呟く。

あの怪物共の進軍速度を鈍らせるために、鉄橋は破壊された。

その橋の先にある野営基地にロックオンはいた。

ＭＳもどきーーーーー「ズイカク」というらしいーーーーーの横に機体を降ろす。

男ーーー斑鳩に言われたとおり、俺はこの場所に同行して来ていた。
機体から降りるように言われ、コクピットを開いて降りていく。

「動くな！」

地面に降り立つと同時に、俺は数人の兵士に包囲された。
兵士のもつ銃の銃口は、全て俺に向けられている。

「おいおい・・・・・・・・・手荒い歓迎だな？」

ロックオンは、ヘルメット越しに飄々とした雰囲気で周りの人間に言った。

「貴官があの戦術機の衛士か？」

目の前に立った男が聞いてくる。
センジュツキってのはあのＭＳもどきのことか。
エイシ・・・・・・ここで言うパイロットのことか？
まあ、そういうことならあってるしな。

「ああ。俺があの機体の”エイシ”だよ。」

俺は目の前の男にそう答えた。

「貴官がそうか。改めて、先程の戦闘で救っていただき感謝する。
私は斑鳩という。」

感謝の意を述べるとともに、簡単な自己紹介をしてくるイカルガという男。

「・・・・・・一応、ロックオンとだけ名乗っておくよ。」

俺は一応自分のコードネームを名乗る。

「……そうか。ではロックオン、殿下が貴官に会いたいと言っている。私についてきて貰うぞ。」

有無を言わさずイカルガは別方向を向く。

「こちらだ。」

「・・・・・・わかったよ。」

後ろから銃を向けられた状態のまま、俺は歩き出したイカルガについていった。

さて。これからどうなる事やら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

俺は黒く染まった空を見上げて、ため息をついた。

To be continuted………?

Alternative story before02「地獄に降り立つ狙撃

感想・意見などお待ちしております

Alternative story before03「邂逅」（前書き）

文修正。2011／12／1

Alternative story before03「邂逅」

京都より離れた位置に臨時設営された斯衛所属の野営基地。

そこかしこには大小様々なテントが設置されているそこを、ロックオンは斑鳩に誘導されながら歩いていた。

その中の一つーーーー仮司令部となっている大型テントの前で斑鳩は立ち止まる。

「斑鳩だ。紅蓮閣下へ……」

斑鳩はテントの入り口に立つ兵士と二三言会話を交わしてから、戻ってきてロックオンへついてくるよう促す。

「ヘルメットは外してゆけよ。」

「オーライ。」

斑鳩がそう指摘し、ロックオンは頭につけていたヘルメットを外した。

中へと入る。

ロックオンの前に立つ斑鳩は奥へ行くと、そこに立っていた人物へ敬礼した。

「紅蓮閣下。第十六大隊隊長、斑鳩悠眞、殿の任を終え、只今帰還致しました。」

２mはあろうかという巨漢が、斑鳩へ向き直る。

「殿の任、大儀であった。ご苦労。」

巨漢ーーーー紅蓮は、一言そう言った。
そして、視線をこちらへ向ける。

「して、此奴がお主の部隊と我が軍の崩壊を救った謎の戦術機の衛士か？」

「左様で御座います閣下。」

紅蓮の問いに、斑鳩は肯定をもって答える。
ロックオンは、こちらへ顔を向けた紅蓮へ向けて言った。

ーーーー即興の芝居だが……切り抜けるしかないか……

内心そう考えて、ロックオンは直立不動の姿勢をとり敬礼する。

「国連軍特務部隊所属、ロックオン・ストラトス。階級は少佐です閣下殿。」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Alternative story before03「邂逅」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ悠陽

紅蓮の後ろに隠れる形で、私はここにいる自分を除いた三人の会話を聞いていた。

「国連軍、とな。」

忠臣である紅蓮が、斑鳩の横に立つ気妙な強化装備を着けた青年へ鋭い視線を向けながら言う。
まず最初に疑問に思ったのは、何故国連軍の者が１人でここにいるという事だった。
紅蓮も同じ事を考えたらしく、その疑問を口にする。
それに対して、青年はこう答えてきた。

曰く、青年が乗っていた戦術機は試作型の新型戦術機であること。

曰く、この地にはそれの実戦テストを目的にいたこと。

曰く、あのタイミングで居合わせたのは機体の調整に手間取ったのが理由の偶然であったこと。

また、実戦テストにおいて、帝国軍の援護も任務に含まれていたこと。

任務内容の今のような大雑把な内容は説明できるが、詳しいことまではこの任務が「極秘任務」故説明しかねること。

である。
しかし、極秘任務とはいえ単機で戦場に向かうのは自殺行為に等しい事だ。
しかも、青年の乗っていた戦術機は、彼の説明からすると新型の試作機らしい。

「そのような任務を帯びながら、なぜそなたはここにいる？」

「本来ならば影から支援することになっていたのですが……何分、状況が状況でやむなく姿を晒したということです。」

こちらの質問に淡々と答える青年。

「では、その極秘任務とやらは誰の命令だ？」

「それも、極秘任務ゆえお答えーーーーー」

芝居がかった様子で、青年が「お答えしかねます」と続けようとしたところで、

「ですが、せめて最低限の事前連絡程度はするべきでは？」

私は紅蓮の背後から姿を現し、青年へ視線を向けながら問うた。
突然現れた私の問いに、一瞬だけ動揺の色を見せた青年。

「殿下？」

「会話の最中、失礼致します。申し遅れました。」

私の前進を止めようとする紅蓮を止め、青年へ簡単な自己紹介をした。

「日本帝国征夷大将軍、煌武院　悠陽と申します。この度は、我が中国の１人を救っていただきました。そなたに感謝を……。」

一礼し礼を述べるとともに、私は再び青年へ向き直る。

「殿下……？」

訝しげな表情でこちらを見てくる青年。
その青年へさらなる疑問を口にしようとした時、部屋のドアが開き一人の女性が入ってきた。

「失礼します。月詠のご無礼をお許し下さい御三方。」

「月詠！？何故そなたがここにいる？」

月詠真耶。
私の護衛であり、先程の戦闘では臨時に第十六大隊へ一時所属していた帝国斯衛軍の衛士。

「申し訳ありません閣下。ですが、早急にお知らせしなければならない事が……」

斑鳩の問いにそう答える月詠。
こちらへ気づき、一礼して斑鳩と紅蓮へと伝える。

「其方におります未確認戦術機の衛士は、先程に帝国柏陵基地に駐

留する国連軍の香月夕呼博士直属の部下である事が確認されました。」

そして、月詠が述べた内容は、先程青年が言った内容が真実であることを裏付けるものだった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

案内された仮司令部のテント。そこで、俺は自分が何故あの場にいたのかを目の前のグレンという男に問われていた。
何とか、この場を切り抜けるためのでっち上げの説明で誤魔化している。

あの場にいた理由で言いづらい部分は、「極秘任務」ということで押し通す。

「ですが、最低限の事前連絡程度はするべきでは？」

そこで初めて、グレンの後ろにいた人物が視界に入り、口を開いた。
横のグレンが”殿下”と呼んだことから、その人物が”殿下”だということになる。

ーーーまだ…若い……

自分へ自己紹介してきた”殿下”と呼ばれた少女は、コウブイン

ユウヒと名乗った。
征夷大将軍なんて肩書きをもってるらしい……だが、年はまだ十代前半か……？

「殿下……？」

思わず疑問符を口にしてしまうほどに、少女はーーーーユウヒは若かった。
まだ幼さを残す顔立ちだが、外見年齢から考えられないほど落ち着いている。
自分を見る瞳は澄んでおり、何もかも見通されているような錯覚に囚われた。

一瞬だけ動揺する。

確かに、彼女の言うことには一理はある。
もし、この国と国連という組織が友好的な関係であるならば、表向きにせよ最低限の事前連絡くらいはするべきだ。

それに、ロックオンは知らないが今は悠陽達にとって国家存亡の危機。

そんな中、国連だけが勝手な行動を取れば、不信感を抱かれる。
ここにきて、何者の後ろ立て（バックアップ）がない状況がひびいてきた。
同時に、やはりここは自分の知る世界とは全く異なるということを確信する。

俺は、今の問い、そして次の問いへの返答に窮していると、自分たちがいる部屋へ新たな人物が入ってきた。

ツクヨミ。そう呼ばれた赤い服を着た女性が、グレンとイカルガへある事を伝える。
そして、その「ある事」の内容は耳を疑うものだった。

「其方におります未確認戦術機の衛士は、先程に帝国柏陵基地に駐留する国連軍の香月夕呼博士直属の部下である事が確認されました。」

今まで自分が言った事を裏付けるかのような内容。
そして、余りにも都合のいいタイミングだった。

ちなみに、ロックオンが国連軍の所属だという根拠の無い裏付けができたのには、「横浜の女狐」こと香月夕呼博士の力が大きい。
彼女は、京都防衛戦の最中に現れた謎の戦術機ーーーーーデュナメスの事ーーーーをマークしていたのだ。
撤退した帝国軍の報告書の中に、「粒子光線兵器を用いる謎の戦術機」なる報告があったため、ＡＬ４と並行して研究・開発が行われている特殊粒子及びそれを動力とした「太陽炉」と呼ばれるものが存在していたため、夕呼が目を付けていたのが主な理由である。

まぁ、それはまた別の話。

「それと、その者に柏陵基地への帰還命令が出ています。」

そう最後に言うと、ツクヨミは報告を終わらせた。

「事情はお察し致しました。」

一瞬の沈黙のあと、ユウヒが口を開く。

「此度の件については、そなたの功績から不問に伏すとします。」

「……殿下、よいのですか……？」

イカルガがユウヒへと言う。

最もな意見ではあるな。

「ええ。」

ユウヒは静かにそう言うと、頷いた。

一室を後にし、俺は再び外にいた。

イカルガや他のパイロット達が乗っていた機体ーーーーーー８２式戦術機（Ｔｙｐｅ－８２）「瑞鶴」というらしいーーーーーーの横に立つデュナメスの足元までやってくる。

「それじゃあ、俺はこれで失礼するよ。」
俺は後ろへ向き直り、そこにいつ女性へ言った。
そこに立っているのは、赤い軍服を着た女性ーーーツクヨミ。
「ああ。送る者が私だけですまない。」
「謝るなよ。いきなり現れて迷惑かけたのはこっちなんだからな？」
俺は、いつもの口調でそうツクヨミに返した。
ツクヨミはどこかやるせないという表情でこちらを見る。
「ああ……確かに、正直に言うと貴方は怪しい。」
「ストレートだな……」
苦笑気味に俺は言う。
「だが、貴方が我々を、閣下を救ってくれたのは紛れもない事実。
それを、果たしてこのような……」
「ーーーツクヨミだっけか？」
俺は、ツクヨミの言葉を遮り彼女の瞳を見据えて言った。
「あんまり気張るなよな？」
「え……？」
ツクヨミが驚いたような様子でこちらを見る。

「こんな情勢だ。だが、そこまでアンタが気張る必要なんてねえよ。」

「……」

俺の言葉を、俺を見据えどこか憂いを含んだ表情で聞いているツクヨミ。

「もうちょっと、気楽に生きていかないとやれる事もできなくなっちまう。」

俺はそう言いながらデュナメスの足下までくると、ぶら下げられている昇降機へ足をかけて上昇を始めた。

「それに、そんな風にしてたら……折角の美人も台無しになっちまうぜ？」

「……なぁ！？」

最後の俺の一言に顔を真っ赤にして素っ頓狂な声をあげるツクヨミ。なんだ。可愛い顔もできるじゃねえか？

「はは。」

苦笑混じりな声をあげ、俺は機体へ乗り込んだ。
システムを待機状態から、巡行モードへ移行し機体を動かす。
モニターにはこちらを見上げるツクヨミが見えた。
デュナメスのマニピュレーターを動かしてで別れを告げる。

「ハロ、海上に出るぞ。」

『了解！了解！』

GNドライブが駆動音を鳴らし始め、緑色の粒子を散布しながら浮き上がるデュナメス。

モニターには、こちらを見上げるツクヨミが映っている。

「さて……情報収集もかねて行くとするか？」

『マカセタ！マカセタ！』

俺は、そう言うと同時に機体を加速させてその場から離脱した。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーーそして、狙撃手は出会う。

ーーーーーその理念を生み出し、人を解り合わせるのを夢見た1人の科学者と、

ーーーーー人類を救う”聖母”になろうと奔走した”魔女”と、

ーーーーー果たすべき約束、護るべき人、護りたいものの為に戦う戦乙女達、そして全てを失った青年に。

次回「横浜」

その出会いは、果たして何を起こすのか・・・・・？

Alternative story before03「邂逅」（後書き）

文のかたちを若干変更しました。
旧バージョンは変だったしなぁ……というわけで相変わらずの駄文を読んでいただきありがとうございます！

それでは、次回会いましょう！

感想・意見などお待ちしております！

Alternative story before04「横浜」（前書き）

文章を統合及び一部改変。

2011／12／5

Alternative story before04「横浜」

ーーーーー1998年8月15日20：00　横浜港周辺ーーーーー

漆黒の闇に包まれた海上。

何も無いはずの海上に、波紋が生じる。

何も無い、というのは些か間違っている表現だろう。

海上を移動するのは、光学迷彩によって周りの風景に溶け込んだ一機の人型機動兵器。

”それ”は、この世界とは異なる技術で造られ、この世界においていかなる兵器の追随も許さず、本来の世界においては「最強の機動兵器」の異名を取った”ガンダム”の名を関した濃緑の狙撃手ーーーー”ガンダムデュナメス”

漆黒の闇に包まれた海上を、濃緑の狙撃手は駆け抜けたーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

Alternative story before04「横浜」

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー帝国軍柏陵基地。

横浜に造られた、日本帝国軍所属の軍事基地。

しかしてその正体は、人類を救うための四番目の計画ーーーーー”ＡＬＴＥＲＮＡＴＩＶＥ（オルタネイティブ）・４”を進める中心の場であった。

帝国軍より国連へ提供された軍事基地。

その一角にある、”オルタネイティブ第四計画”（以降、オルタネイティブ４を略した”ＡＬ４”と呼ぶ事とする。）占有区画の一部に位置する執務室に、香月夕呼はいた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ夕呼

「……ふう。」

いつものように、私は備え付けの椅子に座っていた。

コーヒーを啜りながら、執務机においてあった”ある”報告書に目を通す。

その報告書には、いくつかの写真が添付されていた。

映されているのは、報告書に書かれている謎の戦術機の姿。

明らかに他の既存の戦術機とデザインが違う。

”これ”が現れたのは、つい先日の事だ。

既に陥落した京都において確認されたという。

『動力部らしき部分から謎の粒子を放出し、光線級のレーザーを跳ね返す”楯”とレーザーと同等の威力をもつ”粒子光線兵器”を用いる、未確認の戦術歩行戦闘機。』

すぐさま、私は情報を集め、その戦術機の衛士が斯衛に身柄を拘束されていることを突き止めた。

と同時に、情報操作による手も打った。

その戦術機を機密任務の代物として、衛士を自分直属の部下としたのだ。

その連絡を送って数十分後、未確認戦術機が柏陵基地へ向かった旨が伝えられた。

あれからすでに２０時間余りが経ち、すでに辺りは闇夜に包まれている。

「そう都合いい事が起きるものかしらねぇ……」

そんな事を呟いた瞬間、基地内に警報が鳴り響いた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

柏陵基地は今、夜間にも関わらず異常事態に見舞われていた。

突如として全ての電子機器が異常を起こし始めたのだ。

レーダーはノイズが走り、通信機器においては異常が起こり、基地

内は騒然としていた。
司令部には直ちに柏陵基地司令と香月博士が招集される。
「総員、第二種戦闘配備！基地守備隊に緊急出動（スクランブル）命令をかけろ！」
基地司令が命令を下し、柏陵基地は戦闘態勢に映った。
ライトが点灯され、ハンガーの扉が開いていく。
その直後ーーーーーーーーーー
「し、司令！レーダーに、突然反応が現れました！こ、これは……」
「場所は！？」
「ーーーーー基地上空です！」
ーーーーーーーーーーー基地上空に”それ”が現れた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン
俺は、機体を上陸させそのまま上空を飛行していた。
勿論、隠密巡行での侵入だ。
眼下の軍事基地。
これが、目的の柏陵基地なのだろう。
「目的地には到着したが……」

直後、警報が聞こえてきた。
基地の照明がいくつも点灯し、基地が騒がしくなっている。

「まずったか……？」

溜息混じりに言う。
多分原因は自分だろうなぁ、と他人事のように考えてしまった。
俺の乗る機体ーーーーーデュナメスの動力部は、言わずと知れたＧＮドライヴだ。
そして、それが放出するＧＮ粒子には通信機器などに異常をきたす特性がある。
隠密巡行モードとはいえ、散布されているＧＮ粒子は、見事に柏陵基地の電子機器に悪影響を及ぼしていた。

「こいつは想定外だよな……」

恐らく、この世界ではそれほどＧＮ粒子に対する対策は成されていない。

ＧＮ粒子で構成されていた光学迷彩を解除。
上空にデュナメスの姿が露になった。

「さあて……あちらさんはどうでるかねえ？」

夜間、機体のこともあり化物共にも気づかれてはいない。
眼下の基地を確認すると、いくつかのハンガーから何機かの戦術機ーーーーー前日の戦闘で見た「ゲキシン」とかいう機体と同型機ーーーーーがでてきていた。
他にスマートな外見の別の機体も確認する。

ロックオンは知らないが、それは国連軍カラーのＦ－１５Ｃ（イーグル）の日本帝国軍仕様の８９式戦術歩行戦闘機「陽炎」だ。

「悪いが、こっちは色々とわからないんだ。」

俺は、機体を基地飛行場へ向け、

「少し、強引にいくとするよ。」

俺はそう言って、愛機を基地飛行場へ降下させた。

Ｓｉｄｅ国連軍衛士

国連軍である事を示すＵＮブルーに塗装された撃震に乗る衛士は、突然のスクランブルに戸惑いを隠せないでいた。

「なんだってこんなとこに……。ＢＥＴＡはまだここまできてないだろう？」

機体を前進させて、彼は各機と簡単なやりとりを僚機としながら周囲の警戒をする。

先程から通信にはノイズが走り、それがさらに、彼に不安を募らせ

ていた。

「誰かさんの襲撃なんて勘弁してくれよ……」

『ーーーザザッ。少尉、機体の通信を外部スピーカに切り替えろ。』

「了解です隊ちょーーーー」

彼がそう返そうとした瞬間、”ブチッ！”という音と共に通信が途絶した。

直後、網膜投影に映る飛行場に見たことのない一機の戦術機が降り立った。

「なぁ……！？」

ありえない光景に、彼は息を呑んでいた。

なぜならそれは、信じられない事に誰も飛べないはずの空から現れたのだから。

Ｓｉｄｅ夕呼

外の光景を映し出すカメラ。

そこに映る基地飛行場に、一機の戦術機が降り立った。

背中からは暗くてもはっきりと見える緑色の粒子を微量ながら放出している。

「何を考えている．．．．．？」

突如として現れた戦術機の行動が理解できていない基地司令が訝しげな声をあげた。

自分も同じような気分だった。

突然現れて、展開中の戦術機部隊の前に単機で躍り出る？

「ふざけてるわ．．．．．」

呆れたという風に、私は溜息混じりに画面の向こうの謎の戦術機に乗る衛士に悪態をついた。

Ｓｉｄｅロックオン

着陸を終えて、俺は両肩に装備されているフルシールドをそれぞれの方向に展開した。

武装は全て格納部分にしまってある。

ＧＮスナイパーライフルは右肩部に懸架。

着陸から一分後。

すでに自分は八機もの戦術機とやらにに包囲されていた。

『そこの戦術機、貴様はすでに我々に包囲されている！』

外部スピーカ越しに警告を発してくる相手。

「これで包囲ね。笑わせてくれるぜ……」
その警告に、思わず俺はそう独り言を言ってしまった。
何せ、自分の乗る機体は「ガンダム」だ。
単機で一騎当千の性能をもつ。
まあ……俺の、ガンダムという存在を知らないこの世界ならしょうがないか？

「だがなぁ……」

といっても、自分が基地上空に現れてから相手方が完全な戦闘態勢にを整えるまでにかかった時間は五分。
完全な不意をついたとはいえ、余りにも行動が遅かった。

「ハロ、悪いがサポート頼むぜ？」

『了解！了解！』

そう言うと同時に、俺は操縦桿を動かしデュナメスの右腕を稼働させる。
そして、脹脛部分にマウントされたコンテナが開き、中から現れたGNビームピストルを右手に握らせ抜いた。

「狙い撃ちだな。」

銃口を戦術機の部隊へ向ける。
状況は、一触即発のものになっていた。
相手など、「おいおい。ふざけた事は考えるなよ．．．．」と言っている。
こちらが一機に対し、相手は包囲している八機と、さらに現れた四

機で数は１：１２。
普通に考えれば、俺のとった行動は愚行以外の何者でもなかった。

そして、ここに配属されて間も無い新任の衛士達は、初めて味わう
「本物の恐怖」に押し潰されかけていた。

「さてーーーーーどうでる？」

そうして十分後。
事態は威嚇射撃を放った新任の乗る戦術機によって加速した。

ＳｉｄｅＯｕｔ

◆　◆　◆　◆　◆　◆

銃口が、一斉に火を吹いた。

”ドド！ドドドド！”

威嚇射撃を皮切りに動きを見せたデュナメス。
それめがけて、撃震四機と陽炎四機が銃撃を開始したのだった。

「く・・・！逃がすな！こうなった以上撃墜しても構わん！何としても動きを止めろ！」

中心にいたデュナメスに、銃弾が次々に命中するがーーーー煙が晴れると、そこには無傷のデュナメスがいた。
デュナメスの周囲には淡い緑色の粒子が舞っている。

『ＧＮフィールド、正常ニ展開中！ＧＮフィールド、正常ニ展開中！』

銃撃は、全てＧＮフィールドによって阻まれたのだ。
ＧＮフィールドは、実弾に弱いという弱点を持つが、この世界の突撃砲相手ではまだ有効な防御手段だった。

「ハロ、ＧＮ粒子の散布中止だ。出力を全て火器へ回せ！」

『了解！了解！』

「悪く思うなよ……！」

ロックオンがそう告げた瞬間ーーーーー圧倒的な力による蹂躙が始まった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

飛行場に、煙が立ち上っている。
そこには、四体の戦術機の残骸が横たわっていた。
全てが、陽炎。
あるものは頭を破壊され、あるものは腕を切り裂かれた。
四機の陽炎が全機大破するまでにかかった時間はーーーわずか1分。
最後の一機が倒れると、ロックオンは次だと言わんばかりに無事な機体へ銃口を向けた。

「まだやるか？」

外部スピーカ越しに、冷淡な声が飛行場に響く。
銃口には桃色の光が溜められ、今にも放たれそうだ。

「言い忘れてたが……俺の目的はここの基地の制圧じゃないんだな、これが。」

と、先ほどの殺気など嘘のように、ロックオンはフレンドリーな口調で自分を見る連中へ話しかけた。

「俺の目的は、香月博士に会う事だ。」

圧倒的な力を見せつけて、要求をする。
なるほど。ロックオンのとった行動は、多少強引だが不利な状況におけるコンタクトの方法としては正解だった。
ただ、方法は最悪の場合のものだったが……。
ちなみに、本人が自覚しているというのは余談である。

数秒して、管制塔から通信が入った。
モニターに【ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ】と表示される。
『はぁ・・・・・私が、貴方の言ってる”香月博士”よ。』
数秒して、ロックオンの耳に呆れ口調の女性の声が響いた。
「ご本人自らが応じてくれるとは、感謝するよ。」
おどけた様子で対応するロックオン。
『話したいのなら、まずはもう少し礼儀正しくこれなかったのかしら？』
芝居がかかったような物言いの夕呼。
それにロックオンは、「生憎、のんびりできる様な状況じゃなかったんでね。」と返した。
『・・・・・・・・・とりあえず、ご苦労様とだけ言っておくわ。』
「そいつはどーも。……っと、さて。」
ロックオンはそう言い、夕呼に一応聞いた。
「これから俺はどうすればいい？」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ夕呼

「ふぅ……」

執務室へと戻り、椅子へと座り込む。
隣の部屋にはすでに社を待機させていた。

『副司令、彼をお連れしました。』

外からピアティフの声が聞こえる。

「いいわ。入って頂戴。」

私がそう答えると、ピアティフに続いて一人の人間が入ってきた。
奇妙な強化装備を装着し、頭にはヘルメットを被っている。

「ここまでありがとね、ピアティフ。もう下がっていいわ。」

私がピアティフにそう言うと、彼女は素直に従い外へと出る。

「ふぅ・・・・・・・とりあえず、最低限の礼儀くらい学んだら？」

夕呼は皮肉たっぷりに、素顔を隠す青年に話しかけた。

「悪いが、俺はまだあんたを信用しちゃいないんでね。」

「はぁ・・・・・・・」

まあ、当然のことではある。
何せ、互いに両方の事を知らないのだ。

「でも・・・・・せめて顔くらいは見せてくれない？」

私が、そう青年に言うと青年は考えるそぶりを見せた。

すると、ヘルメットに手を伸ばし、何かをする。

次の瞬間、青年はヘルメットを脱いだ。

「へぇ・・・・・それがあんたの素顔？」

「ふぅ……なんだい？俺の顔はあんたの期待はずれだったか？」

青年は口元に笑みを浮かべながら返してくる。

「ま、これが俺の最大限の譲歩だよ。」

そう言うと、彼はこう名乗った。

「ここまで来れば、大抵の事は話しても大丈夫かな・・・・・？俺は、とある組織に所属していた狙撃手（スナイパー）だ。コードはーーーーー”ロックオン・ストラトス”」

口元に、不敵な笑みを浮かべて。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

「俺がいた組織は、『紛争根絶』なんて大それた事を理想に掲げて全世界に宣戦布告したんだよ。」

香月夕呼に向かいあい立っている青年ーーーロックオン・ストラトスは語り出す。

「大抵の人間は、『ソレスタルビーイング』っていう言葉を聞いただけで目の色変えるんだがーーーー」

「『ソレスタルビーイング』？そんな組織、この世界中どこを探し立っていないわよ？」

「だよな・・・・・じゃあ、MS（モビルスーツ）は？」

「モビルスーツ・・・・？戦術機の事かしら？」

そしてロックオン自身は理解する。

ここが、自分の世界とはあまりにもかけ離れた世界だという事を。

そして、彼の中の疑問は確信に変わった。

「情報があまりにも少なすぎるから断片的にしか言えないがーーーー俺は、どうやら未来か別の世界からここにきたらしい。」

自分という存在が、この世界にとって「イレギュラー」である事を。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー格納庫ーーーーー

所変わって、ここは柏陵基地のハンガー。
空きがあるハンガーの一角に、それは鎮座していた。

ガンダムデュナメス。

主人の帰りを待ち、危険を察知した即座に行動できる様になっている。
柏陵基地の整備班は、そこに鎮座するデュナメスを興味津々に見ていた。
まあ、何せ「機密」という事で一切の干渉を禁止されてるのだ。
しかも、見た事もない戦術機が。

デュナメスのコクピットの中で、ハロは自分を「相棒」と呼んでくれる人の帰りを待っていた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

とりあえず、一通り話し終えたな。

「……」

俺が説明を終えると、すぐに部屋は沈黙に包まれた。

俺自身、正直今の状況は余りいいものではないと思っている。
何せ、機体を手放してここまで生身で来ているんだ。
最大限こっちに敵意はないって事を見せつけるためにこんな愚行を

犯しているわけだが……。

ちなみに、俺の世界の説明は、言えない部分ははしょって説明した。

第一に、自分の世界における石油などの化石燃料が枯渇している事。

それによって大きく発展した太陽光発電システムが、化石燃料から主流になったこと。

それによって世界中では紛争や戦争が多発していること。

そして、世界は大きく三つの国家に分かれている事。

他にも表向きに話せることは全て話した。

「ーーーーそれじゃあ、あんたは本当に”別の世界”から来たのね……」

「……ん？やけにあっさりと認めたな？」

拍子抜けな程に俺の言ったことは納得された。

「そりゃそうよ。」

そう返してくる夕呼は、俺へ今が何年の何月何日かを告げる。

「今は、西暦１９９８年８月１５日。つまり、あんたの世界の年ーーーー２３０７年じゃないってことよ。」

「１９９８年！？」

「どういうことだ？」、そんな風に言いそうになるのを抑えてから言葉を絞り出す。

「なるほどね……。そいつが決定打ってわけか。」

「それに、もう一つあるけれど……それは貴方に言っても仕方が無いことね。」

意味深な事を夕呼は言う。

俺は深いことは詮索せず、逆に夕呼へ今、”この世界”がどうなっているかを問うた。

そこから始まったこの世界の歴史についての話に、俺は驚きを隠せなかった。

この世界の歴史は、俺のいた”本来の世界”でも起こった第二次世界大戦の結末から変わっている。

俺の世界において第二次世界大戦が１９４５年に終結したのに対し、この世界では１９４４年半ばで日本が条件付き降伏をしたのを皮切りに、事態は大きく加速し、ドイツに核が落とされて第二次世界大戦が終結した。

その後、様々な分野における技術は俺のいた世界よりも早期に発展して行き、１９５８年の時点では火星探査計画なんてものが現実のものになっていた。

１９５８年の火星探査計画における無人宇宙船ヴァイキング１号。

それが火星地表に降り立ち、火星表面の調査をしていた時に”それ”は現れたらしい。

一枚の写真を最後に消息を絶ったヴァイキング１号。

その写真に写し出されてたものは、後の「人類に敵対的な地球外起

源種」ーーーＢＥＴＡだったという。

「その頃のあらゆる科学者達は歓喜したわ。何せ、地球とは別の星で生命体を発見したんだもの。」

「でもーーーーー」と区切り、一息おうてから彼女は自重気味に言葉を紡ぐ。

「当時の人間が期待した”希望”なんてものはすぐに打ち砕かれたわ。」

１９６７年。

月面における国際月面恒久基地「プラトー１」。

そこに所属する調査隊が、火星で発見された生命体と遭遇しーーー消息を絶ったのだ。

発見されたのはーーーーーーーーーー彼らの無残な亡骸。

「そこから、全てが狂い始めた。」

そうして始まった第一次月面戦争。

その結果はーーーーー

「敗北だったわ。最悪の結末よ。惨敗。『月は地獄だ』ってのは、当時の月面基地司令官が残した言葉。」

人類は、地球外における有効な攻撃方法を持ち合わせておらず、今現実で目の当たりにしているようなＢＥＴＡの大群を相手にしたの

だ。
負けるのは誰の目に見ても明らかだった。
俺だってそう思う。

「そして１９７３年。中国・カシュガル自治区にＢＥＴＡの着陸ユニットが落下。」

そこから、ＢＥＴＡの地球侵攻が始まった。
開始当初は、空軍力が圧倒的な物量を空からの攻撃で蹂躙して戦いを人類側優位に進めていたが、「光線属種」の出現によりいっきに不利な状況に立たされた。
地球上における最初の敗北を皮切りに、人類は次々に故郷を追われていった。

現在ーーーーー１９９８年の時点で、ユーラシア大陸の支配権はＢＥＴＡによって奪われ、中国大陸もまた同じく、残っているのはアジア諸国と日本、アメリカ、その他各国の暫定政府のみであった。
日本もまた、その一部がＢＥＴＡの支配地域に加わったという事は、記憶に新しい。

「ここまでが私たちの世界の大雑把な事柄よ。人類は今、生きるか死ぬかの瀬戸際に毎日立たされているってわけ。」

話し終えると、彼女は溜息をついた。

「……」

予想以上に、今のこの世界における世界情勢は悪い。

「貴方の持つ凄まじい程の技術と力。それがあれば、少なくともこ

れまでよりも死者の数が抑えられるわ。」
そんなことを彼女は口にした。
「何が言いたいアンタ……？」
俺は、訝しげな視線を彼女へ向けて問いかけた。

Ｓｉｄｅ夕呼

「私の言いたい事は単純な事よ。貴方の持つ技術を私たちに提供してほしいの。」
私は、ストレートに自分の要求を述べる。
外見一つとっても、あの戦術機は自分たちの知る戦戦術機とは全く違う技術で作られていることがわかった。
そして、イオリア・シュヘンベルグが研究する原初粒子とそれを動力とした「太陽炉」と酷似した動力機関。
「そんな簡単に、俺があれを明け渡すと思うか？説明した通り、あれは最も機密度の高い代物だぞ？」
「でも、それは”貴方の世界”の話でしょう？」

そう。あくまでも、青年の言う「機密」というのは、屁理屈言えばこの世界のものでは無いのだ。

「……」

青年が押し黙る。

「それ相応の対価は支払うわ。それでも聞けないならーーーー」

そう言いながら私は机の引き出しに手を伸ばす。

「やめときな。迂闊な真似をしない方がいいぜ。」

と、青年は私の動きを見て警告して来た。

「学者さんが、しかも女がまともに撃てる代物じゃねえよ、銃って代物はよ？」

彼はそう言うと、背中に手を伸ばして何かを取り出す。

「それに、俺は”危ない組織”の構成員だぜ？」

手に持っているのは、ハンドガン。

その銃口は、真っ直ぐ自分の頭部を捉えている。

どこに隠し持っていた……！？

「妙な真似をすれば撃つ。迂闊だったなミス・コウヅキ。」

「私が他の連中を呼ぶって考えは浮かばないのかしら？」

私は好戦的に答える。
口元には笑みを浮かべながら。

「悪いが、その時はあんたを人質にして逃げさせてもらうとするよ。それに、潜入操作はお手のもんだしな。」

「その自信はどこからくるのかしら？」

「少なくとも、今のあんたたちの軍隊が束になってかかって来ても、俺には勝てない。わざわざ単身でここまで来て、保険をかけてないと思ったのか？」

またしても一触即発。
剣呑な雰囲気が、執務室を満たす。
腹の探り合いにおいて自信があったが……力には勝てない。
その時だった。

「ま、ここでそんなこと起こしても、俺には何の利益にもならんがね。」

突然、青年は頭部を捉えていた銃口を降ろし、先ほどの殺気など嘘のように霧散させて飄々とした口調で肩を竦めのだ。

そして、彼は私が望んでいた答えをだしてくれた。

「協力してやるよ。あんたたちにな。」

「……え？」

我ながらに、馬鹿みたいに驚いてしまった。

「だから……協力するって言ったんだよ。」

バツの悪そうに青年は言う。

「やけにあっさりと承諾してくれたわね。」

内心では震えながら、しかし表面上は平静を装いながら言う。

「言っておくが、さっきの脅しは本当だ。と言っても、そいつは最悪の場合を想定しての”保険”だよ。」

彼は、そう返してきた。

「協力してやる代わりに、俺には最低限の衣食住を提供してくれよ。じゃないと生きていけねえ。」

「それだけ？」

「まぁ……強いて言えば、あとはある程度自由に行動できるような地位が欲しいな。」

縛られるってのは性に合わねぇしな。そう言って彼はどこか遠くを見るような表情を一瞬する。

「どうする？」

彼は、逆に問う。

自分と、協力関係を築くかと。

「いいわ。貴方の言う通りの事をしてあげるわ。」

「オーケイ。交渉成立だな。」

私は、先ほどの剣呑な雰囲気など嘘のように彼と握手を交わした。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ここに、魔女と狙撃手の契約は完了した。

この出会いは、何をこの世界にもたらすのか？

物語は少しづつ加速して行く。

イレギュラーを加えて、加速していく。

その先に待つのは、果たしてどのような結末なのか……？

To be continuted……

Alternative story before04「横浜」（後書き）

新ためて読み直し、文章統合及び一部改変させてもらいました。

前のを読んでくれた方、申し訳ありません。

今後もこういう事があるかもしれないですが、どうか暖かい目で読んでやってください！

感想、意見などお待ちしております！

Alternative story before06「屈辱」（前書き）

今回は、かなりの短文です。
息抜きみたいな感じですね～

正直な話、題名はその場で思いついたものw

それでは、お願いします！

Alternative story before06「屈辱」

ーーー1998年8月24日　横浜・帝国軍柏陵基地ーーー

作戦指令室。
そこに設置されたモニターに表示されている戦況。
それにより、室内は重苦しい雰囲気に包まれていた。
三日前の京都陥落、そして敵の手に落ちた佐渡島。
度重なる損耗によって、今や日本は風前の灯火になっていた。

ここで一時的にとはいえBETAの動きが停滞した事は、人類にとってみれば好機であった。
しかし、これは「反抗」のための好機ではなく、「守る」時間を稼ぐという好機だ。
現状の帝国軍の戦力では、圧倒的なBETAの物量に対処できない。
それがわかっていながら、つい先日、アメリカは日本に対して正式な「日米安全保障条約」の破棄と、在日米軍の撤退を通告してきた。
そうして最大の戦力を欠いた帝国軍は、徐々に追い詰められていった……

Alternative story before06「屈辱」

オルタネイティブ第四計画の本拠地として接収された柏陵基地。
国連は、緊迫する戦況をかんがみて本拠地の一時的な移動を帝国へ要請する。
新たな拠点として選ばれたのは、第二帝都・仙台における帝国軍仙台基地だった。

「おいおい……ここを捨てて逃げるのか？」
その辞令を受けたという事を夕呼に聞いたロックオンは、開口一番に夕呼へそう言った。
「状況が状況なのよ。それに、あなたとシュヘンベルグ博士が研究・開発している『太陽炉』の製造も、こんな状況でいつ前線になるかもしれない場所じゃ満足に出来ないでしょ？」
「だがな……」
ロックオンがこの世界に来てから十日。
その間に、戦況は益々悪くなっている。
「だったら、俺がデュナメスでーーー」
「却下よ。こんな状況で隠し球出したりしたら、それこそこの国は滅亡よ。」
「しかしな……」
「それに、この状況であんたが戦況を好転させたとしてもそれは一時的なものにしか過ぎないわ。二度目、三度目と言ってる間にあなたは消耗していく……」
夕呼の言う事は最もなことだ。
どれほど機体の性能がよかろうと、乗っているのは生身の人間だ。
それに、ロックオンは一度それを経験している。
「だから、より安全度の高い場所で反抗の為の牙を研ぐの。ここで駒を失うわけにもいかないしね……」
彼女直属の部隊ーーー国連軍Ａ－０１連隊。しかし、結成当初はそれこそ連帯規模であったが、今はたった二つの中隊にまで数をすり

減らしていた。

「”力”あるのに……俺はなにも出来ないって言うのか……」

もしも、刹那や他の仲間たちがいれば。
四機のガンダムが揃っていれば。
そんな「もしも」の事を考えてしまう。
だが、現実にガンダムは一機しかおらず、それのパイロットである自分もたった一人の存在だ。
それ以外は、通常の（ガンダム以外の各国家群）ＭＳよりも格下の性能しか有していない……

「今は耐えるしかないの、わかって頂戴。私は移動の為の色んな手続きをしなきゃいけないからもう下がって頂戴。」

夕呼はそう言うと、会話は終わりとばかりに止めていた手を再動かし出す。
ロックオンは、無言でその場を立ち去った。

Ｓｉｄｅロックオン

ーーー無力だ。

そう、感じた。”あの時”の記憶が脳裏に蘇る。
故郷のアイルランドで起こった忌まわしい事件。
それを繰り返さぬように牙を研いだ。
そうして”力”を手にして、世界を相手に戦った。
そして今、自分は世界を救う為に戦おうとしている。

だが、世界の情勢はそれを中々許してはくれない。
「また……俺は助けられないのか……」
通路を歩いていると、一人の少女が目に入った。
兎の耳のようなカチューシャを頭につけた銀髪の少女。
彼女はこちらを見ると、ハッとしたような表情になった。
「どうしたんだい？お嬢さん。」
俺は、少女へそう話しかけた。
少女は無言でこちらを見ている。
「おいおい……お嬢さん？返事してくれないとお兄さんもーーー」
「……霞」
俺が言おうとした言葉を遮って聞こえた声。
それは、目の前の少女が発した声だった。
「……社　霞……です……」
か細い声で自分の名前を言う。
「カスミ……っていうのか？よろしくな。俺はーーー」
「ニー……ロックオン・ストラトスさん……」
「そうそう。そういや、カスミはミス・コウヅキと一緒にいる子だよな？」
「……はい。」
「つーことは、俺の名前はミス・コウヅキから聞いたのか？」

俺がそう聞くと、彼女は数秒してから「……はい。」と答えた。
そして、一瞬だけ顔を俯かせてもう一度俺を見る。

「貴方は……無力なんかじゃありません……」
「……え？」

唐突に言われた言葉に、俺は眉をひそめる。

「悲しい事がいっぱいあったけど……貴方は無力なんかじゃありません……！」

そう言うと、カスミは「失礼します」といってその場から立ち去った。

「……あんなこと言われちまったが……口にでもでてたか？」

そんな独り言を俺はつぶやく。

ーーー『無力なんかじゃない』、か……

ロックオンは、言われたことの意味を考えながら自室へと戻っていった。

１９９８年８月２５日。
ＡＬ４拠点の仙台基地移設開始。
同年８月３０日に移設終了。

そしてーーー１９９８年９月３日、ＢＥＴＡによる神奈川県侵攻が始まった。

戦いは敗北に終わり、残されたのは瓦礫と骸。
それらの下に、奴らは巣食う。
後に、「Ｈ２２ハイヴ」ーーー通称・横浜ハイヴの建設が始まった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

Alternative story before06「屈辱」（後書き）

うーん……これで、いくつか話を書いて明星にいきますかな～

ロックオンのプロフは、後々書くとしよう……

感想、意見などお待ちしております！

Alternative story before07「戦う理由」（前書き

更新遅れてすみません・・・・・！

ようやくできましたが・・・相変わらずの駄文・・・

暖かい目で、読んでやってください。

Alternative story before07「戦う理由」

１９９８年の日本にとって悪夢の7月から、世界の時間軸はすでに半年以上が経過していた。

日本におけるＢＥＴＡの侵攻は、本州島をほぼ制圧することで一時的に停止した。

１９９９年2月時点で、日本での死者は３６００万人以上。

凄惨な戦いは、人類側の敗北で一時幕を下ろした。

半年以上という年月は、嫌が応にも人類に自分たちの無力さを再度認識させた。

同時にーーー彼らは引けなかった。

手を止めれば、その瞬間に自分たちは滅びさる。

『死ぬわけにはいかない。まだ生きたい。こんなふざけたことで、明日を奪われてたまるものか。』

誰もがその想いを胸に、恋人を、家族を、守ろうと必死に戦っていた。

ーーーそして、反撃の狼煙は静かにあげられていた．．．．．．

Alternative story before07「戦う理由（ワケ）」

ーーーあれから、半年以上が経過した。

ーーーその間、自分は何をしてきたのか？

ーーー生き恥を晒して、戦うための牙を磨いてきた・・・・・・

Ｓｉｄｅロックオン

目が覚める。

目の前に広がるのは、自室のデスクだ。

「寝ちまったのか・・・・・・」

朦朧とする意識を覚醒させて、俺は顔をあげた。

書類仕事の最中に、寝てしまったようだ。

「ふぅ・・・・・・」

立ち上がり、背伸びをする。

そうして俺は、歩を進め部屋をでた。

部屋をでて、ロックオンが向かった先はＡＬ４専有区画として割り当てられたハンガーの一つ。

ハンガーへと入り、俺の視界に広がったのは一機の戦術機だった。

外装を剥がされ、シートがかぶせられている。

他の部分では、取り外した装甲を別のものへと取り替えていた。

改造されているのは、「吹雪」だ。

ロックオンのもつ技術ーーーハロに記録されていた、２３０８年時

点における様々な技術ーーーを応用して、この「吹雪」を改造しているのだ。

「よう、おやっさん。どうだい、こいつの状況は？」

俺はハンガーへ足を入れると、戦術機の足下で指示を出す初老の整備士に声をかけた。

横浜で、初めて会い、ここ数カ月世話になっている整備班長だ。

「お、少佐殿でしたか。ええ、こいつの改良は順調に進んでますよ。」

こちらへ顔を向けたおやっさんは、そう気楽に答えてきた。

現在、このハンガーでは、これの他にあと一機の「吹雪」の改造が行われている。

これらは、香月博士が、極秘裏に進める次世代戦術機開発の先駆けという意味合いも込められていた。

「開発コード「ＧＮＸ－０１」。仮名称は、【９９式戦術歩行戦闘機「雪風」】か・・・・・・」

この機体は、同時にある技術も使用できるよう改良が施されていた。ＧＮ粒子を用いた、「粒子光線兵器」を使用出来るようするための改良。

そのために、俺の前に立つ一号機には「こちらの世界」で使用されていたＧＮコンデンサーの劣化版を装備することになっている。

「次の作戦までに、こいつを実戦投入して結果を出すんだよな・・・・・」

俺は、ミス・コウヅキに言われた事を口にしていた。

『あんたが結果を出してくれなきゃ、国連のお偉方も、帝国のお偉方も認めてくんないのよね・・・・・・だから、次に行われる予定の明星作戦で結果を出してちょうだい。』

なので、デュナメスを投入する案も持ち出したが「それは最終手段だ。」ということで却下された。

確かに、「本来の世界」でもそうだったが、GNドライヴを搭載し圧倒的なスペックを誇った「ガンダム」という存在は、「世界そのもの」を破壊した。

『あの機体(ガンダム)は、強力すぎるの。それを見せつけてどっかの馬鹿野郎が調子に乗ったらたまったもんじゃないわ。』

最後に、そう愚痴まじりにコウヅキが言ったのを覚えている。

「少佐・・・・・・」

「ん？神宮寺じゃねえか？」

傍らに、神宮寺が立っていた。

彼女は、この横に並ぶ二号機のパイロットーーーじゃなかった衛士だ。

「私は、ここへ機体を見にきました。少佐は？」

「俺もだよ。こいつの状態を見ておきたくてな。」

他愛もない会話をかわす。といっても・・・・・・ 内容は他愛ないものじゃないが・・・・・ 他愛ないって言うのはただの俺個人の見

解だが。
しばらくした後、俺は時間を見て彼女を食事に誘った。
「夕食をご一緒に・・・ですか？」
「そうそう。まあ、たまには部下と食事を取りたいなって思ってな。」
気楽な口調で俺は続ける。
神宮寺は少し考えたあと、俺の申し出を受けた。
「おやっさん。んじゃ、よろしくな～」
「おう。任されて～」
おやっさんに「後はよろしく。」と言いながらハンガーを後にした。
Ｓｉｄｅまりも
ＰＸへと入る。
横には、ストラトス少佐が。
時間が遅かったらしく、すでにＰＸにいる人の人数はかなり少ないものになっていた。
カウンターへ行き、京塚伍長へ挨拶しながらメニューを頼んで食事を受け取る。
「おわ！？おばちゃん・・・量が多くねえか？」
「いいのよ～。若いんだから、ご飯はちゃんと食べないとねえ、お兄さん？」
何か・・・・・少佐の食事がかなりの大盛りにされていた。

席へとつき、対面する形で少佐も座った。
「いただきます」と言い、夕食を取る。
いつものように、静かに食事をとる。
しばらくして、食べ終わり顔をあげるとーーー大盛りの食事と格闘していた。

「・・・・・・・・・・」
「く・・・量が多いぜ・・・」

どうやら、食いきれないらしい。その姿を見ているとーーーつい、苦笑が漏れてしまった。
同い年、というのに、彼は年不相応に幼く見えた。

「ふふ・・・・・・」
「・・・・・・・」

と、気づいたら私は少佐にジト目で見られていた。

「あー・・・その・・・なんでしょうか？」
「おいおい・・・・・人が大変な時に、笑うことはないだろう？せめて助けてくれ・・・・・」

机に突っ伏しながら言う少佐に、苦笑まじりに「いいですよ」と答えて残りを一緒に食べていく。
しばらくしてから、食べ終わり、数秒の沈黙。
少佐は、「ふぃ～食った食った～」などと言っている。

こうして彼を見ているだけでも信じられなかった。

ーーーーー彼が、自分が育てたヴァルキリーズと敗北したとはいえ

追い詰め、一対一では自分を下したということが。
だから、唐突に聞きたくなった。
「少佐ーーー」
「ん？なんだ？」
「あなたは、どこでアレほどの操縦技術を？」
Ｓｉｄｅロックオン
「あなたは、どこでアレほどの操縦技術を？」
唐突に、投げかけられた疑問。
まあ、当然と言えば当然か？何せ、俺は突然現れて、ミス・コウヅキが『凄腕の衛士って事を証明するから、模擬戦決定～♪勿論、相手はうちの秘蔵の戦術機中隊とまりもよー。』などとケンカをふっかけた上に、１２対１という圧倒的不利な状況でありながら、もてる戦力と戦術を駆使して、敗北したとはいえ追い詰め、しまいには目の前の女性を下したのだから。
「どこで・・・と言われてもな・・・・・」
正直、答えに困った。何せ、こっちは本来世界を敵に回した私設武装組織（ソレスタルビーイング）の構成員にして、レベル７相等のガンダムマイスターだからな・・・・・・
「少佐は、それほどの腕を持ちながら前線ではなくここにいる。」
「・・・・・・」
俺は、無言を貫く。

今は、「答えられない」。
まあ、真実ははなさくてもいいのだから、答えてやるのも一つの手だな・・・・・・

「しょうーーー」
「俺は、フリーの狙撃手だったんだ。昔から、射撃が得意なんでな。」

身の上話を一つ。
真実に虚偽を混ぜて言葉を紡ぐ。

「俺は・・・故郷で家族四人と幸せに暮らしてたよ。」

アイルランドでの、幸せな日々。
母がいて、父がいて、妹がいて、弟がいてーーー自分がいた。
弟は早い時期に家をでたが、それでも家族と過ごした時間は幸せなものだった。

「それが、ある事件で俺は全てを失った。自爆テロだったんだ、その事件は。」

テロだった。ショッピングモールで起こった自爆テロ。
いつの時代もテロ組織というものは存在する。実際、この半年間でこれほど人類は追い詰められているのに、犯罪は絶えず、各地でテロが行われていた。
金のため、名声のため、生きるため。理由は様々だ。
国家間においての争いでも、「テロ」は使われていた。

「俺は恨んだよ、”テロ”というものをな。」

だから、”力”を磨き続けた。
だから戦う為に、”力”を手にした。
ソレスタルビーイングに参加し、「世界を壊し」て「世界を再生」するために戦って、戦って、その果てに死んだ。

「俺は、幾つもの戦場を渡り歩いて、死線をくぐり抜けたこともある。死にかけたこともある。」
「・・・・・・」
「そうしていつしか・・・・・・俺は、こんな”力”を持ってた。」
人殺しのための、血塗れた手。
世界を変革させるために、その手を鮮血に染めた。

「それ故の、この”技術(ちから)”だよ。これで一応話は終わりだ。」
「少佐・・・・・・」

「悪いな。こんな話しちまって。」と言いながら、俺は席を立った。

Ｓｉｄｅまりも

ＰＸをでて、私室への帰路につく。
専有区画に割り当てられているため、帰る方向は一緒だ。
私は少佐の後ろを歩きながら、先ほどの話の事を考えていた。
話せない部分があるのだろう。話の内容は、かなりはしょられていることは明白だった。
深く聞くということもできたかもしれないがーーー彼の表情を見て、それはできなかった。
少佐が浮かべた表情は、「喪った者」と同じものだった。
かけがえのない大切な物を喪った人が浮かべる表情。

『俺は、”テロ”を憎む。』

彼は、ＢＥＴＡという存在以上にーーー人の「歪み」に位置するモノを憎んでいた。

だから、私は別れ際に聞いた。

「少佐。」

「ん？」

「あなたはーーー今も、そしてこれからも何のために戦うのですか？」

ーーーー戦う理由。

この国の人間ならば、「御国のため」「皇帝陛下のため」「征夷大将軍のため」。

他国ならば、「祖国のため」「失った故郷を取り戻すため」。

自分はーーー大切なものを守るため。失ったものは戻らない。なら、これからを「失わない」ために戦う。

貴方はーーーー？

「俺は、正直わからないな。ただ、”力”があるのに、『守れない』ってのは癪だろう？だから、まずは目に見える範囲で、『護る』ために戦う。それが、俺の戦う理由だよ。」

彼は、いつもの飄々とした口調で、そう答えたーーーーー

To be continuted.....

Alternative story before07「戦う理由」（後書き

なんか・・・ かなりへんかなこの文章・・・・・・

感想・意見などおまちしております。

プロフィール（前書き）

現時点で、決まっている設定をば公開！

プロフィール

――――主人公は勿論、ロックオン・ストラトス！

「狙い撃つぜ！」や、数々の名言と、ファンに熱い台詞を残していったキャラ。

【プロフィール】

名前：ロックオン・ストラトス（本名ニール・ディランディ）

年齢：２４

外見・服装：００１ｓｔ当時のまま。眼帯は無し。服装は、普段着（原作で着ていたものいくつか）か、ＣＢパイロットスーツ（デュナメス搭乗時）か、衛士強化装備（国連軍仕様）か、国連軍軍服か、国連軍軍服（簡易略装。ＴＥで、ユウヤ達が着ているものと似た形状）

性格：原作を踏襲しつつ、少しお人好しに。

備考：かつては、私設武装組織「ソレスタルビーイング」に所属し、ガンダムデュナメスのガンダムマイスターとして戦った。最終決戦の折、サーシェスの乗るガンダム・スローネツヴァイと死闘を演じて、致命傷を負うも倒す。
戦闘後は、デュナメスをハロに託して、自分は宇宙空間へ身を投げ出して息を引き取った。

何者かの力によって「現在(いま)の世界」に飛ばされ、ここで戦い生きていくことを誓う。
夕呼とコンタクトを経てＡＬ４のメンバーとなり、同時にこれに参加しているイオリアの太陽炉開発にも協力することとなる。
かつては、デュナメスの開発に付き合っていたこともあって、その経験を発揮して新型戦術機の開発にも参加することになる。
階級は少佐。所属は、Ａ－０１中隊第５中隊――――通称ウルズ中隊。コールサインは「ウルズ００」。

パイロットとしての技量は、ガンダムマイスターであることでも示されるが高い部類に入る。
実際、ヴァルキリーズと１２対１という圧倒的不利な状況でシミュレータによる模擬戦を行い、あと一歩のところまで追い詰めた。（乱戦に持ち込み、同士打ちなも利用して追い詰めたが、最後の四機というところで連携攻撃の前に敗れ去った。）
一対一では、まりもを下している。

搭乗機：ＧＮ－００２「ガンダムデュナメス」
　　仮称９９式戦術歩行戦闘機「雪風」

【スペックデータ】

ガンダムデュナメスは、Ｗｉｋｉ参照。

名称：仮称９９式戦術歩行戦闘機「雪風」【ＴＳＦ－ＧＮＸ－００１（尚、この最初の「ＧＮ」は、（非太陽炉搭載型でＧＮコンデンサーを装備したからではあるが）粒子光線兵器を用いる機体という意味。）】

動力・その他：改良型バッテリー、およびその他。ＧＮコンデンサー（劣化版。武装と、一部推進装置にも試験的に使用される。）、改良型跳躍ユニット（仮称９９式噴射跳躍システム）

装甲：従来のスーパーカーボンから、Ｅカーボンへ換装。

武装：

９９式突撃砲（ＸＡＭＷＳ－２４　試作新概念突撃砲をＡＬ４権限で接収し、裏から流れさせたのを改良・弾数を増加させたもの。従来のものよりも、性能は３０％向上している。）

９９式無反動砲（元ネタは、ＳＥＥＤのジンがもっていたバズーカ。状況に応じて装備。装備する場合は、直接手に握って出撃する。）

試製新型近接長刀（ＧＮソードを参考に作成。ＧＮ粒子によるコーティングは実現できていない。）

プロトタイプＧＮライフル（劣化版ＧＮコンデンサーに繋がれたＧＮライフル。形状は、アストレアが装備していたものを参考としている。大きさは同じ。連続で発射可能な弾数は２発と少ない。しかも、１発目ト２発目の間にもタイムラグが生じる欠陥品。だが、威力は通常のＧＮライフルよりも高い。）

プロトＧＮマシンガン（上記の武装と同じくだが、こちらは弾数を優先している。といっても、一発一発の威力はかなり高い（１２０ｍｍ並）。連続発射数は３０発。速射性に優れる）

ＧＮスナイパーライフル（デュナメスのを流用。ロックオンの乗る一号機のみ装備。）

プロフィール（後書き）

現時点で決まってる行き当たりばったりの設定です～

それでは～

Alternative story before08「反撃の狼煙ーーー明

久々の投稿です！
前から読んでくれてる人はお久しぶり、初めての方々は初めまして！
相変わらずのダメ作者アーチャー【狼】です！
好きなものが最近増えました！（キャラ的な意味で

文を統合及び一部修正。

それではどうぞ！

Alternative story before08「反撃の狼煙ーーー明星作戦（オペレーション・ルシファー）」

ーーーーー1999年8月。

人類は、ユーラシア大陸において行われた「パレオゴロス作戦」以来の、それに次ぐ大規模反攻作戦を開始した。

昨年に、半分近くの領土を失った日本帝国。

その本州島奪還を目的とした作戦ーーーーー明星作戦。

国連軍主導において行われるこの作戦に参加するのは、言わずと知れた国連軍のアジア方面における実働可能な戦力、大東亜連合軍ーーーーーそして、日本帝国軍残存部隊。

アメリカ軍も、国連軍所属として後方支援という名目で参加した

この作戦に参加する者たちは、それぞれの思いを胸に戦場へ向かう。

ーーーーーある者は、故郷を取り戻すため。

ーーーーーある者は祖国を取り戻すため。

ーーーーーある者は愛すべき人を、大切な家族を、帰りを待つ人を守るため。

皆、その手に銃を取ったーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Alternative story before08「反撃の狼煙、”明星作戦”」

◆　◆　◆　◆　◆　◆

作戦開始、1時間前。

帝国連合艦隊および、国連軍・大東亜連合合同艦隊は、主目標である横浜ハイヴへ艦砲射撃を行うため、艨獰達は静かに海上を駆けていた。

・・・・・・

何十隻もの艦艇が、海上を走る。

その中に、それはいた。

大艦巨砲主義が世界を支配していた頃、全ての戦艦を打ち砕くべく

技術の粋を結集して建造された事実上世界最強・最大の戦艦。
４６ｃｍ４５口径三連装主砲塔３基９門を搭載した超弩級戦艦「大和」。
かつて、世界最大・最強の戦艦として君臨すべく生み出された鋼鉄の竜は、今その牙の矛先を護るべき祖国へ向けていたーーーーー

「まさか、この”大和”の主砲が、倒すべき戦艦ではなく祖国へ向けられようとはな・・・・・・・」
時代に合わせてより近代化された艦橋に立つ、帝国軍の軍服を纏う「大和」艦長、田所は、そう独り言を呟いた。
時刻は、０６：００。
艦内では、各部署で忙しなく戦う準備が行われている。
軌道降下兵団も、すでに突入コースへ入っているはずだ。
「艦長、全艦砲撃準備完了いたしました。」
彼の部下である「大和」副長が、全ての準備が整った事を告げる。
「了解した副長。全艦へ通達、別命あるまで待機せよ。」

微速前進している全ての艦の艦載砲塔は、その全てが横浜へ向けられている。
現在この海域には、「大和」の他「武蔵」「長門」、巡洋艦数隻、駆逐艦多数が浮かんでいる。
この艦隊から少し離れた場所には戦術機母艦数百隻が航行し、海中には何隻もの潜水艦が潜んでいた。

全てが、ここを取り戻すための布陣。

時刻は刻一刻と迫るーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆

別海域では、帝国連合艦隊もう一つの艦隊が展開していた。

「大和」率いる艦隊が第一陣ならば、これは第二陣ともいうべきもの。

水上打撃部隊は、大和型三番艦「信濃」を筆頭に戦艦3隻と巡洋艦数隻、それに駆逐艦数隻。

戦術機母艦部隊には、何十隻もの護衛艦艇と旗艦「最上」が共に行動していた。

「作戦開始まで、残り僅かね……。」

最上艦橋で、小沢艦長の隣に立つ白衣姿の女性ーーーー香月夕呼は、そう、独り言を呟いた。

彼女はＡＬ４の責任者として、そしてこの作戦を推した者としてここに居た。

勿論、この作戦に参加させる配下のＡ－０１中隊の全般的な指揮を取るという名目もあるが。

夕呼は、時間を確認してからピアティフに命令し、ハンガーで待機している直属の部下へ通信を入れた。

「通信、繋がりました。」

「ありがと。」

夕呼は、ピアティフ渡されたヘッドセットを受け取り装着する。

「聞こえるかしら、ウルズ００？」

インカムから、彼女は声をかけた。

『感度良好、十分聞こえてるよミス・コウヅキ。』

数秒して、飄々とした口調の男性の声が返ってきた。

「そろそろよ。わかってるわね、ストラトス少佐？」

夕呼は皮肉気な笑みを浮かべながら言った。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン

「ふぅ……それで、こいつは最終確認のための通信かい？」

『そういうことよ。』

強化装備に着替え、機体コクピットで作戦開始・出撃を待っていた俺は、通信が入ってきたのに気づき、回線を開けた。

通信を入れてきた人物は、今は自分の上司たる女性ーーーーーミス・コウヅキだった。

網膜投影越しに、ミス・コウヅキと会話を交わす。

『作戦開始間際。チビってないか確認しにきたのよ。』

「そいつはどーも。」

相変わらずの口調で、何やら言ってきたが受け流す。

「機体の準備は万全。俺と隣の神宮寺さんがヘマをしなけりゃ大丈夫だよ。」

俺もいつものノリで返した。

『軽く言ってくれるわね・・・・・・』

ミス・コウヅキは呆れ気味という口調でそんな事を言う。

『ヘマはしないですよ少佐。少佐こそお気をつけ下さいね？訓練中は、結構危ない目に遭っているのですから。』

それに合わせて、自分と同じ部隊として行動する神宮寺が皮肉を言ってきた。

「おお怖い怖い。肝に銘じておくよ」

そう言っておどけてみせる。

大きな作戦の前で緊張してるのは一理ある。

今日は、俺にとっても”こいつ”にとっても初の実戦だ。この世界におけるって言葉はつくがな。

『そろそろ作戦開始。二人とも、ヴァルキリーズとオーディンの先導、よろしく頼むわよ？』

「オーライ。仰せのままに、ってな。」

俺は軽い口調で、

『任せて下さい。』

神宮寺は堅い口調でそれぞれ答える。

と、

『はぁ・・・・・まりもぉ～？あんた、少しは肩の力を抜いたら？じゃないと、お肌に悪いわよ？』

ミス・コウヅキがおちゃらけた口調で神宮寺をからかいだした。
おいおい……大事な作戦前じゃないのか？

『よ・け・い・な・お・世・話・で・す！！まったく……大事な作戦前なのに、夕呼は緊張感の欠片も無い言動ばっかりして……少佐の前って言うのもあるのに……』

「『何か言った（か）？』」

『何もありません！！』

何か愚痴らしき事が聞こえたので聞いてみる……が、即座に「何もない」と返されてしまった。

『それじゃ、武運を祈るわね狙撃手さん？』

「……オーライ。」

数秒して、ミス・コウヅキとの通信が切れた。
ほどなくして神宮寺との通信も切れる。

「さて、と……。」

俺が、ため息一つ。

「事はどっちの方向へ運ばれるかねぇ……。」

そんな事を呟いた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

（挿入ＢＧＭ『男たちの大和』）

海を、鋼鉄の竜が駆ける。

「作戦開始時間です艦長。」

「ああ。」

副長が作戦開始と告げ、田所は総員へ命令を下す。

「全艦、主砲全門一斉射撃用意！！」

４６ｃｍの、世界最大の主砲が、全ての砲門を日本本土へ向けた。

「各艦、タイミング合わせ。左舷ロケット砲座および、艦対地ミサイル全門発射用意！！」

全ての準備は整った。

ーーーーーそしてここに、反撃の狼煙があげられる。

「主砲、一斉射・・・・・・・撃てぇ！！」

裂帛の掛け声と共に全艦艇の全ての火砲が、一斉に火を吹いた。

放たれる何発もの砲弾とミサイルとロケット弾。

それらが横浜の廃墟となった街へと降り注ぎーーーーー街から、無数の”矢”が放たれた。

人類から、「空」を奪い去った忌々しい１つ目の怪物ーーーーー光線級。

それらが放つ正確無比のレーザーが、次々に砲弾やミサイルが貫かれていった。

「やはり、奴らは待ち構えていたか……！」

『スティングレイ部隊がこれより攻撃を開始します！！』

「了解した。全艦、そのまま砲撃を続行せよ！」

スティングレイ中隊。

水中戦術機母艦部隊が護衛するそれらは、８１式強襲歩行攻撃機「海神（わだつみ）」で構成された部隊だ。

これの他にもう一つ部隊が存在するそれは、海中から目標地点への強襲上陸と、上陸地点の確保を目的としている。

『オルシナス０１より、スティングレイ０１へ、これより戦闘海域に入る。準備はいいな？』

『勿論だオルシナス０１。』

『それでは行け！海兵隊の底力を奴らへ見せつけろ！』

同時に、潜水艦から次々に海神が切り離されていく。

――――――――――――海の神は世に放たれ、不届き者へ神の鉄槌を下す。

『スティングレイ０１よりスティングレイ全機へ！海兵隊の恐ろしさを奴らへ思い知らせろ！全て蹴散らすんだ！！』

『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』

海神が速度をあげて、浮上していく。
浮上と同時に変形した海神の部隊。
それらが、一斉に攻撃を開始した。
十分に、海岸に接近した海神から放たれる無数の銃弾とミサイルが、次々に上陸地点のＢＥＴＡの軍勢をなぎ払っていく。

『上陸地点の確保急げぇ！』

『隊長！光線級が！』

『奴ら……！』

それに伴い、早々に、”掃除屋”が現れた。

空陸ともに脅威となる光線級。それが、群を成して大群の後方から姿を現したのだ。

このままでは、揚陸地点に向かっている戦術機母艦部隊が攻撃を受ける。

『スティングレイ０１よりＨＱ（ヘッド・クォーター）へ！至急、支援砲撃を頼む！海岸に光線級の団体さんが現れた！このままじゃ、戦術機母艦部隊が狙い撃ちにされるぞ！』

『ＨＱ了解。現在、支援砲撃の準備を行っている。出来次第、砲撃を開始する。』

『急いでくれ！このままじゃやられてしまう！』

海神の部隊は、この間にも戦線を押し上げていた。

と、次の瞬間ーーーーー目の前を光が通過し、背後の戦術機母艦部隊へ吸い込まれていった。

人を「知的生命体」として認識していない相手だ。こちらの常識が

通じるはずもない。
容赦なく放たれたレーザーは、容赦なく戦術機母艦へ襲いかかった。
レーザーの直撃を受けた数隻が、何もなせぬまま無念の内に轟沈する。

『く・・・・・！出撃準備が完了している機体から、順次発進せよ！』

各艦の艦長が、各々で指示を出す。
戦いの場で、想定外の出来事は日常茶飯事だ。
それが、ＢＥＴＡ相手の戦いならば尚更。
次々に、戦術機母艦の甲板から撃震や陽炎、不知火、Ｆ－４Ｅ、Ｆ－１５Ｃが出撃する。

『レッド０１より残存機へ、これより強行上陸を行う！堕ちるなよ！？』

『ブラウン０１より各機へ。全機、噴射跳躍最大出力！辿りつけなければ終わりだ！行くぞ！』

『ランサー０１よりランサー各機へ、我に続け！各隊とともに、突破をはかるぞ！』

どれほど被害を受けようとも、彼らの戦意が衰える事は無い。
なぜなら、彼らには戦う覚悟があり、退く事は許されないのだから
ーーーーーーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー戦場を、何十体もの鋼鉄の巨神が駆け抜けた。
ーーーーー機械仕掛の巨神は、主に従ってその故郷を怪我した物怪へ神の鉄槌を下す。
ーーーーーしかし、物怪は奪い去ったこの地を守るべく牙を向いてきた。
ーーーーーそして、戦いは続く。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

戦場を、何十機もの戦術機が駆け抜けた。
帝国軍示す灰色の「撃震」「陽炎」「不知火」。
それに続くのは、国連軍所属である事を示すＵＮブルーの「ファントム」「イーグル」だ。

『ここから出ていけクソ野郎！ここはーーーーー俺たちの居場所だ！』

それに乗る衛士達は口々に叫び、立ちはだかる障害たるＢＥＴＡの大群を突き崩してゆく。
後方からは支援砲撃が降り注ぎ、眼前に紅蓮の炎と黒色の雲を出現させた。
重金属雲が空に形成され、今の時代を表す様に空は灰色に染まる。
その下を、戦術機部隊が駆けた。

銃撃音が鳴り響き、不快な破裂音や炸裂音とともに戦車級が吹き飛ばされ、要撃級が崩れ去る。

『うおおお！！俺たちの故郷を取り戻すんだ！！』

『ここからいなくなれＢＥＴＡ！』

『お前たちが、土足で居座っちゃいけない場所なんだよここは！』

『人様の土地に土足で入り込んで、勝手してるんじゃねえ！』

奪われた故郷を取り戻すために、彼らは戦う。
崩れ去る怪物の骸を踏み越えて、彼らは目指した。
人類を、恐怖のドン底まで陥れた象徴とも言えるハイヴの地表構造物（モニュメント）目指して。

ーーーーーさらに、戦場へ新たな参入者が来訪する。

大気圏外からの死を覚悟した命がけの降下（ダイビング）を経て、軌道降下兵団が戦場へ参戦する。

『アクイラ０１よりアクイラ各機へ！二度目の降下の気分はどうだい！？』

『はっ！最高だなこいつはぁ……！これで、奴らに一矢報いれる！！』

『その意気だアクイラ０２！アクイラ全機、気を緩めるなよ！ここで着地に失敗なんてヘマをするな！』

『『『『了解！』』』』』

国連軍を示す「ＵＮ」の文字を肩につけたＦ－１５Ｃが、群れを成してハイヴ上空へ降下していく。

それを迎え撃つようにーーーーー無情（レーザー）な光がハイヴ上空に形成された重金属雲を突き抜け、軌道降下兵団の戦術機甲中隊へ襲いかかった。

『く……！』

アクイラ０１が、網膜投影に映る火の玉を見て唇を屈辱に歪ませる。

当然だ。

奴らは空にいる存在（モノ）全てを焼き尽くす悪魔だ。

それが、空を飛ぶ大鷲（イーグル）を逃す筈がない。

『くそったれ……！』

真横を、レーザーがすり抜けた。

その一分後に、アクイラ０１のイーグルが目標地点へ着地する。

同時に、コールインを終えていた部隊とともに、アクイラ中隊も突撃を開始した。

『さあ仕事の時間だ大鷲ども！たっぷりと奴らにプレゼントをくれてやれ！！』

裂帛の掛け声とともに、アクイラ０１が駆るイーグルが装備している二門の突撃砲が火を吹いたーーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆

ハイヴを中心に何十にも敷かれた防衛線。

ＢＥＴＡによって形成された肉の壁を突破するべく、作戦に参加する衛士達は奮闘していた。

そこには、当然の如く、雪辱を晴らすのに燃える帝国斯衛軍の姿もあったーーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆

横浜某所。

無数の戦場のうちの一つを、色取り取りの戦術機が駆け抜けた。

山吹色に塗装された００式戦術歩行戦闘機「武御雷」を筆頭に、白き「武御雷」１１機からなる部隊ーーーーー白き牙部隊（ホワイトファングス）が美しい陣形を形成しながらＢＥＴＡの大群へ突撃する。

『ホワイトファング０１よろホワイトファング全機へ！！その名の通り、その牙をもって奴ら噛み砕け！！』

『『『『『『『『『『御意に！』』』』』』』』』』

精鋭部隊「白き牙部隊（ホワイトファングス）」隊長、帝国斯衛軍篁　唯依中尉の号令のもと、先行配備された「武御雷」の部隊がＢＥＴＡの大群へ斬り込んだ。

『さて……全機聞こえているな？我々も、戦乙女に負けぬよう精進するべきかな？」

『隊長、おふざけはそこまでにして下さい？』

『わかっているよ。先行配備された新たな剣。あまり気に食わない設計思想だが使いこなして見せるとしよう。』

ホワイトファングスに続いて、黒く塗装された武御雷の部隊が突撃を開始する。

この明星作戦に合わせて、帝国斯衛軍は殿下直々の命令の元に虎の子の先行配備型００式戦術歩行戦闘機「武御雷」を実戦投入していた。（余談だが、形式番号が００式なのは、本来２０００年以降に配備される予定だったたから。）

犠牲にした機能は大きい。されど、不知火以上に洗練された性能は、一級品の輝きをもってＢＥＴＡを薙ぎ払っていた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

『綾峰中将………あなたの無念は、必ずや………！』

『沙霧中尉！』

『わかっている！　聞こえているな？　全機、帝国の精鋭の力、とくと見せつけてやれ！』

『『『『『『『『『『はっ！！』』』』』』』』』』

優秀な軍人でありながら、時代の流れに殺された不運の名将の遺志を継いだ武人は戦場に立つ。

彼らの志は一つ。

━━━━もう、これ以上は喪わぬために戦うのみ……！！

彼らの意思を体現するかのように、一機械仕掛の侍（不知火）が仇成す不届き者へ天誅を下す。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

地中奥深く。

ハイヴから、蟻の巣のように伸びた横坑。

その中を移動するＢＥＴＡの大群は、静かに指揮をとる者の指示を待っていた。

すでに、彼らの準備は整っている

━━━━━━障害、排除開始。

史実よりもさらに苛烈な人類の猛攻は、その上をゆくＢＥＴＡの物量によって塗りつぶされようとしていた。
鋼鉄の巨神達の前に、さらなる怪物が立ちはだかるーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆

ーーーーー洋上、横浜周辺海域ーーーーー
旗艦「最上」を筆頭に航行する第二陣は、ＢＥＴＡの増援出現に伴い出撃の最終準備を行っていた。
第一陣によって上陸地点は確保され、逆上陸は用意になっている。
しかし、戦いは益々苛烈を極めるだろう。
戦術機母艦の中で、衛士達は戦いの時を待つーーーーーーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅロックオン
予定されていた時間が迫る。
もう一刻も猶予は無い。
そんな状況でも、俺の心は自然と冷めていた。
結局のところ、人を殺す戦闘ではないというところが大きいのだろう。

「……我ながら、図太い神経をしてるな。」
暗い機体の中で、静かに出撃の時を待つ。

ーーーーそして、出陣の時は来た。

『エコーα1よりHQ、全艦艦載機発進準備よし！』
艦の昇降機（エレベーター）が起動して、機体が上へと持ち上がっていく。
眼前に広がるは灰色の海と空。
視界の先にある陸地も、灰色に染まっている。
『HQ了解！全機発進せよ！繰り返す、全機発進せよ！』
号令と同時に、戦術機が次々に戦術機母艦の艦上から飛翔した。
噴射跳躍で跳び立つ戦術機部隊。
『いくぞヴァルキリーズ！全機、続け！』
『オーディン中隊、動くぞ！我らの力を見せつけろ！』
『『『『『『『『了解！』』』』』』』』』』』』

Ａ－０１連隊の、二つの中隊が出撃する。
目の前の戦術機が飛び立つのを確認してから俺は動く。
「いくぞウルズ０１！背中は任せた。」
『了解……！』
「ウルズ００、ロックオン・ストラトス、出撃する！」
『ウルズ０１、出撃する！』

オーディン、ヴァルキリー両隊に続く様に、ウルズのコールサインを持つ二機が出撃したーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆

『パープル０１より、ＣＰ！数が多すぎる！至急、支援砲撃を！』
ＢＥＴＡの大群を、他の中隊と相手取るパープル０１は、悲鳴にも似た声をあげた。
彼らは、ハイヴを目指して眼前の大群の強行突破を測るが、圧倒的な物量の前にそれが遂行できずにいた。
補給用コンテナがあるとはいえ、物量にはいずれ押し負ける。

『こちらＣＰ。パープル０１聞こえるか？』

『パープル０１よりＣＰへ。感度良好だ！返答は！？』

『すまないが、支援砲撃にはしばらく時間がかかる。貴官達は、現戦力で対処されたし。』

『なに……！？』

無情にも告げられる支援砲撃を期待するなという言葉。

最早彼らには退路は無いというのに。

『尚、そちらには国連軍の一個中隊が向かった。それが到着次第、協力して現戦域の突破を再開せよ。』

『たった一個中隊！？ふざけるな！そんな戦力でーーーー』

この状況で、ただの一個中隊が戦力に加わったところで状況が変わる筈が無い。

『く……！結局、自分の身は自分で守れってことかよ……！』

『隊長！戦域に侵入してくる中隊があります！これは……』

『なんだ……？』

ーーーーそう。ただしそれは、ただの一個中隊であればの話だ。

戦域マップに表示される新たな１２機の戦術機。

そのマーカーは国連軍だが、機種はパープル０１もよく知る９４式戦術歩行戦闘機「不知火」だった。

国連軍で、不知火を装備している部隊など聞いた事が無い。

そして、次の瞬間「それ」が眼前に現れた。

『こちら、国連軍オーディン中隊所属碓氷大尉だ。微力ながら、貴官らを援護する。』

『あ、ああ……』

網膜投影に映ったのは女性衛士。

しかも、階級はパープル０１より上の大尉だ。

『オーディン０１より各機へ。さぁ、狩りの時間だ。』

獰猛な笑みを浮かべる碓氷。

そしてーーーー試験的に組み込まれた新ＯＳを装備したオーディン中隊による反撃が開始された。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

『いくぞ、ヴァルキリーズ！戦乙女に恥じぬ戦いを見せろ！』

伊隅の号令と共に、ヴァルキリーズの不知火が攻撃を開始した。

押し寄せるＢＥＴＡへ向かっていく１２機の不知火。
改良され、試験的に導入された新ＯＳによって強化された不知火が、主たる戦乙女達によって戦場を駆け抜ける。
より洗練された動きと、連携によって、怒涛の勢いで戦術機部隊を押し戻そうとしていたＢＥＴＡの大群に綻びが生じ始めたーーーーー

◆　◆　◆　◆　◆　◆

『く……！』
何十体ものＢＥＴＡに囲まれた迷彩色の戦術機ーーーーー不知火・壱型丙。
それに乗る男は人知れず舌打ちをした……と言っても、結局のところ彼の率いた部隊は彼を残して全滅したからであるが。
『これはまあ……キツイね本当に。老体には骨が折れる物量だ。』
彼は、かつて斯衛に身を置き、その中でも”精鋭”と呼ばれた男だ。
名を、巌谷榮二。
階級は少佐で、今は帝国技術廠に所属する。
今現在この戦場に彼がいる理由は、実戦配備されたこの壱型丙の実戦試験が主なものだった。

ちなみに、この機体はデータ取りも兼ねているが、巌谷用にチューンが施されている。

『おいおい……相手するのは可愛い娘(こ)か、唯依ちゃんだけにして欲しいもんだ……！』

さりげなく親父発言をしながら、巌谷は不知火・壱型丙を走らせる。

両手に持つ突撃砲で眼前のＢＥＴＡを薙ぎ払い、退路をひらこうとする……が、肉の壁はそう簡単には破れない。

あっという間に突撃砲は弾切れとなった。

『残弾はゼロ。残るは短刀と長刀だけ……これだけで切り抜けるしかない、か……。』

兵装担架(ウェポンラック)から長刀を抜き、両手にもって構える。

次の瞬間ーーーーー不知火を砕こうと腕を振り上げていた要撃級の眼前から、不知火・壱型丙が消え失せた。

”ザシュッ……！”

血飛沫をあげて、要撃級が崩れ去る。

その背後には、長刀を振り下ろした態勢で静止する不知火がいた。

『行かせてもらうぞ……！！』

巌谷の掛け声とともに、跳躍ユニットを噴射させた不知火が突撃を

始めた。
機体が加速し、轟音を響かせながら迫る要撃級へ向かっていく。
『邪魔だ！！』
一閃。
刃は横一文字に要撃級を切り裂いた。
血飛沫をあげて苦しむ要撃級を踏み台にして、それを蹴り飛ばしながら次の目標へ。
動き回り、次々に仲間を葬り去っていく不知火を格好の餌として、ＢＥＴＡが群がっていった。
戦車級が飛びかかり、それを長刀の一閃で吹き飛ばす。
さらに突撃してくる突撃級の突進を間一髪で回避しながら、神速の斬撃でそれを屠る。
だが、長刀が限界を迎えるのにそう時間はかからなかった。
一体の突撃級を受け止めたのが、その長刀の限界を決めた。
吹き飛ばされる不知火。
そして、長刀が真ん中からバキリと砕けて折れる。
『限界、か……。』

武装は、もう……無い。
ならば、ここで自爆して果てるか？そんな考えがすぐ横をよぎった時。

”ドォン……！！”

風切り音とともに、どこからともなく飛来した銃弾が、巌谷の眼前に立ちはだかった要撃級へ着弾した。
爆炎を撒き散らしながら要撃級が倒れる。

『何だ……？』

『……ザザーー……ーーザザーーー……こーーーウル……ーーー』

オープン回線から、ノイズ混じりの通信が入ってきた。
しばらくして回線が安定し、ノイズ混じりながら若い男性の声が耳にはいる。

『こちらーーズ００。聞こえるか、そこのーー機？生きているなら返事をしてくれ。』

『国連軍……？』

巌谷が向けた視線の先に、ＵＮブルーの戦術機が二機立っていた。

『こちらウルズ００。聞こえるか、そこの戦術機？生きているなら返事をしてくれ。じゃないと助けたーーー』

『聞こえている。こちらは、帝国陸軍所属の巌谷だ。孤立無援で頑張っているとこに助けをもらえて感謝しているよ。』

巌谷は、そう礼を述べた。
すぐさま相手が返答を返してくる。

『そいつはどーも。それで、あんたの機体はどの位の燃料が残っている？俺たちが支援するからできるなら後退して欲しいんだがな。ちなみに、後方の邪魔者は掃除してあるから帰るのは楽だぜ？』

『感謝感激だな。もし生きて会えたら酒を奢るとしようか？』

軽口を二三言交わしてから、巌谷は開かれた退路にそって二機と合流した。

『後を頼む。死ぬなよ。』

巌谷はそう言い残して撤退した。
その後ろ姿を見送りながら、彼は無言でこちらを見ている彼女へ話しかけた。

『おいおい。作戦行動中だからってそんな怖い顔しなさんなよ？』

『少佐。少しは緊張感というものをもって下さい……』

軽い口調で話しかけたのが悪かったのか？
彼女は呆れ顔でそう答えてきた。

『オーライ。まあ、これでも真剣そのものなんだがね。』

突撃砲を戦術機に構えさせ、彼はいつもの飄々とした口調で意気込んだ。

『折角ここまで来たんだ。こっからは派手にやろうか？』

『だからと言って、死なないで下さいよ……？』

『安心しろよ。』

一歩踏み出す「雪風」。

『俺はまだ、死ぬわけにはいかねえ。』

トリガーを引いて、銃撃し、向かって来た戦車級を吹き飛ばした。

「ーーーーーさぁ、真打ち登場だ。派手に行こうか！！」

口元に笑みを浮かべた狙撃手は、そう怪物どもに告げたーーーーーーー

（推奨ＥＤ：あんなに一緒だったのに）

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｔｅｄ……

ーーーーーさて、どうだったでしょうか？

文自体はそこまで変えていないんですよね……。ただ、穴があったり、文が変だったり……というかまあ今も十分変なのですが、とかを修正しての再投稿です。

なので、もしかしたら待っていてくれた方々は「またかい……」とか思っちゃうでしょうね……すみませんダメ作者で。

ですが、これからちょくちょくまた更新していこうと思うので、生暖かい目で見守っていてください！（……むしろ、見守って下さい。（涙）

それでは次話でお会いしましょう！

感想・意見などお待ちしてます！

最後に一言。

ーーーーーついてこれてる？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8127s/

Muv-Luv Alternative ―地獄に降り立つ狙撃手―

2011年12月8日01時43分発行